
不良と私

秋元愛羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

不良と私

【Nコード】

N4627N

【作者名】

秋元愛羅

【あらすじ】

親が勝手に決めた婚約者。それは
不良
だった?!金持ちなのに庶民的感觉のお嬢様と不良の話。『いやいや、ありえないですから』

死刑宣告

一通の手紙。

それは私の人生を変えた。

何十にも重ねたいつ見ても見苦しい着物。

私の後輩から『がんばってください』そう言われながらやってくれたメイク。

私には似合わない赤の口紅がそれを語る。

突然やってきた家からの手紙。

それは死刑宣告されたのも同じ。

“ 3月11日にて際脇ホテルにて見合いを行う。 10時までに正装にて合流”

完全に業務連絡と化した手紙はありえない内容。

見合い？この歳に？

ありえない。いや、思わなかったわけではない。その可能性は頭の中にあつた。

だが、この学校に在学中はそんなものは来ないと思つていた。

早く見積もつて卒業後。遅くとも大学卒業と踏んでいたのに……

私は野澤漣。野澤グループの一人娘。

そして元次期後継者。

元の意味は……。今はいつか。この話は厄介だから。

私は今日、婚約する。

会ったこともない人に。

死刑宣告（後書き）

これはホムペの作品の改正、連載にしたものです。もし、気が向き
ましたらそちらのほうもみてください。

見合い（１）

私は今となってはただ野澤家を繁栄させるための駒でしかない。

それはいつも刻んでいる悪魔の言葉。

「零さん」

「お久しぶりです、お母様」

「早めにいらしてたのね、その心構えいいことだわ」

そんなこと思っただけに。

心の中ではなんでこんなやつのために時間を割かなければならないのだ、そう思ってるくせに。

「ありがとうございます」

「こちらは霧崎紅葉さん、そして若葉さん。

あなたの婚約者の霧崎庄吾さんのご両親よ」

相手はシヨウゴっていつのか。

まあ、忘れるけど。

「はじめまして、野澤湊です」

いつも使っている愛想笑いをする。自慢ではないがこの笑顔が愛想笑いだということに気づいたのは今のところ一人だけだ。

まあ、彼女自身、この笑顔が機械的で好きではないと言っているだけだが。

こうして私は見合いと言う戦場に向かった。

見合い(2)

ススッ

私のお茶を啜る音が反響する。

ここにいるのは私一人。

あの人は会議があると言って出て行ってしまった。

分かりやすい嘘。

だからこの場には必然的に霧崎家の人間しかないはずなのだが。

私の婚約者、キリザキショウゴが来ていない、らしい。

おかげで2時間ほど待たされている。

彼らの話によると私の婚約者は現在彼らが所有する別荘で住んでおり、そこから学校に通っているらしい。

それからそこは指定場所とされたホテルから遠いのでここに変わって貰ったことも。

その話から推測すると婚約者は大学生、しかも交通が不便な所。国公立大学だと思う。

まあ、40を超えたおっさんじゃないだけましか。

出来ればこのまま来なければわたし的にバンバンザイなんだが。

ガラッ

突然扉が開いた。

切り上げるのか？そう期待しつつ扉のほうを向いた。

そして目を疑った。

そこにいるのは・・・・・・・・・・・・・・・・完全に不良と呼ばれるであろう人物がいた。

見合い(3)

ああ、彼を見て私は確信した。これが狙いだっただと。

つかあいつらも同じ考えか。なんちゅうめんどくさいことを。

「えっと……………はじめまして、野澤零です。」

心身共に尽くすよう努力致しますのでよろしく願います」

で、いいのかな？面倒だけどどんな相手だろうとちゃんと接しなければならなければならないから。

だけど一気にひっくり返された、別の意味で。

彼は眉をよせあからさまに嫌な顔をした。

あつれ・・・・・・・・失敗したかなあ。

それじゃあやばくね？私。

内心焦りつつ冷静を装った。

『当主なる者焦っていても平然としている。絶対に焦った表情をばらすな』

隠居した爺様が言っていた言葉。

誰であろうが冷静であれ。次期後継者として育てられていた頃に身についた教訓。

これらはどうしても抜けないのだ、体に染み付いて。

「お前、中身、最悪だな」

いきなり言われた言葉。

脈絡も主語もない言葉にただただ驚くばかり。

ただ、今、別の意味であの子を思い浮かべているのは何故だろう・・・？

見合い(4)

思い出していた。あの日のことを。

あの日、私は彼女に会ってすぐはつきりと言われた。

『私はあなたが嫌いです』

それは私を変えた出会いだった。

彼の思っていることとは違う意味でのきよとんはもつと彼を怒らせたらしい。

「チッ。やっぱりな。あいつだと思ってやがる。どいつもこいつもうちの会社を取り込もうと必死なんだな。」

2時間遅れても何一つ言わずいるなんてよっぽどなんだな、お前のところ。俺は関係ねえけど。

「かそのキモい笑顔やめてくんね？こっちが胸糞悪くなる。」

ついでにその赤い口紅もお世辞にも似合わねえ。

お前は関西のおばちゃんか」

や、やばい……………

目の前の彼が言っている言葉が笑えて……………

「泣いてんのか、お前。

うぜえ。恨むんならお前のお父様とお母様にしな」

も、もう……………だめ。

「ぶつ。はははは」

やばい、本当に爆笑もの。

完全にこの人面白いんだけど。

今度は彼がきょとんとする番だった。ついでに変な人を見る目はやめて。

もっと笑っちゃうから。

見合い(5)

やっと見つけた。

私を私として見てくれる人。

私を野澤の人間ではなく一人の女として見てくれる人。

数分後・・・・・・・・

「あ~~~~~笑えた。完全に爆笑モンんだけど」

「爆笑する場面があるなら言ってくれ。お前完全に壊れてるぞ」

「酷いな。嬉しかったのに」

「どこの部分が」

「愛想笑いを見抜いたところ。」

『どんなときも本心を見せるな』って私の家の家訓？みたいなもので、いつも愛想笑いしてたからこれでも私自信があっただよ。

だから嬉しかった。

私を見てくれてるみたいで」

「あっそ」

「でも二人目なんだけどね」

「二人目かい」

「うん」

見た目は完璧“THE 不良”なのに意外に絡みやすい。

うん、第二の悠理だ。

「で、お前は何のために俺と婚約するんだ？」

突然の真面目な話。

でも、彼自身は嫌そうだ。

「さあ、知らない。こつちもメリットないのに」

「・・・・・・知らない？」

そんなはずないだろ。いらぬ俺とまで結婚するんだから何かあるはずだろ」

「ないよ。野澤財閥はそう簡単につぶれるような会社じゃないし、今のところ不況の景況もないし」

まあ、本当に不況がでたらつぶれる可能性大だけど。

「ならなんで」

「多分、ごみ処理」

「は??」

意味分かんない顔をしてるけど、多分そうだと思う。

でも、彼に言う必要はない。

彼は関係ない存在だから。

それから沈黙が続いてあることに気づいた。

もうすぐ帰らないと。門限に引つかかる。

「私、帰らないと。」

えっと、よろしく、ショウゴ君」

「あ、ああ」

私はなににか言いたそうな彼を残して学園へ戻った。

天才と私（１）

昔々、それはそれはすばらしい天才がいました。

私立帝南学園。そこはいわゆる金持ち学校である。

だが他にも有名なスポーツ選手、医者、弁護士などを排出することが多いため天才が集まる学校とも呼ばれている。

だが、学園内の詳しいことは外部では知らされていない。

ただ学園出身のスポーツ選手が口々に言う「もっと素晴らしい天才がいる」しか分らない。

そんな帝南学園に入学した私。

この学園の仕組みはとても面白い。

自分たちの素性は明かさない。明かす時は緊急事態のみ。

中等部は午後8時、高等部は午後10時のまで学園の外の外出可能。

初等部は先生の付き添いのみ。

学園内ならばいつでも可能。

イベント事は何かない限り全員参加。

そして“five”。

これは中等部に上がる時先生、顧問、サポーターが決議して決める
“天才の集まり”。

もちろん高等部に上がって頭角を出すものもいるからこの時一緒に
決議される。

“five”の役割は例えるとアイドル。

イベント事の花形を飾ったり、生徒の相談にのったり。

まあ、天才と呼ばれるだけで面倒ごとを押し付けられる集団だ。

それよりも中等部、高等部の女子からたまに“姫”と呼ばれる最も厄介なものが有るのは別の話。

これは私が中等部2年のときの話。

私は初めて“天才”と呼ばれる者であったときの話。

天才と私 (1) (後書き)

ここから遷が中学2年の時の話になります。これを話さないとなが
ややこしくなるので.....

天才と私（2）

回る回る人の運命輪。それは誰かをつなぎ合わせては別れさせる。

この出会いは偶然か必然か。

神のいたずらはここで始まったのかもしれない。

それはまだ生暖かい3月の頃。

急に私は理事長室に呼び出された。

「あれ、澪ちゃん？」

「おはよう、華音^{カノン}ちゃん、優希ちゃん。あとその子は？」

「おはよう、優希ちゃんの後輩だっ」

「要麻由子です」

「ああ、聞いてるよ、日本記録打ち破った子。あなただったんだ」

「いや、そんなにすごいことでは………」

言葉を返そうとしたら優希ちゃんにさえぎられた。

「堅つくるしいのなし！！ついでに理事長室行こうか」

「まあそうだね」

そんな話をしたあと目的地へ向かった。

ガツチャ

「おはよう、みんな来たねえ」

「「「おはようございます、マリちゃん」」」

佐々木真里菜さん。

この学校の理事長で佐々木グループという世界で5本の指にも入る大企業の社長さん。

だけどその正体は誰も付いていけないほどのテンションが高いお母さんの存在。

そんな人がテンションが低いなんて何かあることを示している。

「さて、要ちゃんも中学生になったことだし察するとおり4月に“five”の継承式をやります」

やっぱり、というべきかなんというか。

さっき言った通り要麻由子は高飛びで日本新記録を樹立した子。正確には中学生の部で。

で、彼女の先輩、川ノ井優希は幅跳びで大会新記録更新中の子。

はじめに私に声をかけた、山野部華音はワンポイントの悪魔と言われるほどの卓球の実力者。

「それと遅いわよ、悠理^{ユウリ}」

えっ

そこにいたのは要麻由子と同じ年と思われる子。

ついでに私、いや全校生徒全員が知っている女の子がいた。

時田悠理

彼女を知らぬものはいない。

だって何故なら彼女はこの学園でもっとも尊敬されている天才の子供だから。

これが私とその後異様な速さで“姫”という尊敬される値についた天才、時田悠理との出会い。

天才と私（3）

真つ直ぐすぎる彼女の言葉は例えそれが何者であろうと屈しない強さがある。

ただそれを受け入れるか受け入れないかは私たち次第。

「悠理、さっきの話聞いてた？」

「想像できますから大丈夫です」

「そう、なら私は退出しようかな。これから先一緒にいる仲間だから仲良くね？」

そういうとスキップして出て行った。

この空気をどうしろと？

「ま、まあ仲間だし、自己紹介でもしようか」

「必要ないですよ。噂ぐらいは聞いていますから」

そういつと出て行こうとする天才。

“他人は他人、私は私” 主義の私は追いかけないけどどうやらこの2人は許さないみたいだ。

要ちゃんのほうは彼女を知っているらしく関与しないという顔。

「悠理！！！！明日から付きまとうから」

そう宣言する優希ちゃん。それ、立派なストーカー宣言よ。

「そうだそうだ、嫌って言うても付きまとしてやるんだから」

便乗する華音ちゃん。楽しそうな玩具見つけたっていう顔しないの。ばれるわよ。

頭の中で2人の宣言を隅でつつこんでる私はフルに頭を回転させて彼女にどう接しようか考えていた。

確かにその場限りだが6年も付き合う人間。

ある程度話せる関係のほうがいいか。

「澪ちゃんも、麻由子ちゃんもなんか言ったら？」

「へっ？」

「私は、別に……………」

そう言って視線を下げる要ちゃん。過去に彼女と何か合った感じだ。

私はゆっくりと彼女に近づいた。

「はじめまして。名前は知ってると思うけど、野澤漣です」

そういう私をじっと見つめる、彼女。

そんなに凝視するような場面ではないはずだけど。

それから視線を外さずそのまま彼女は口を開いた。

「私はあなたが嫌いです」

私を含めその場にいた全員が凍りついた瞬間だった。

天才と私（４）

一気にシーンとなった部屋。彼女の爆弾発言だ。

それにしてもなんと言うか……………天才だからなのかただ単に常識がないだけか。いや、後者だ、絶対。

なんなんだ、この子は。

「言いたいことは言ったので失礼します。

あと、ストーカーするのは構いませんが部活の邪魔はしないでください。もうすぐ昇格試験があるので」

本当に言うことは言って去って行った爆弾、いや台風少女。

こうして第一印象は別の意味で害のある天才と位置付けた。

あれから数日後、私はあまり関わろうとしなかった。

それは彼女の爆弾発言かはたまた自慢の愛想笑いが効かなかったのが怖いのか。

まあ、どっちにしろ彼女が関わっていることは間違いない。

ついでにストーカー宣言した2人は制御役の要ちゃんも交えて騒いでいるらしい。

優希ちゃん曰わく、少しは世間話を出来るようになったらしい。

「零先輩、お疲れ様でした」

「うん、お疲れ様」

弓道の自主練習。

昔は弓道は好きではなかった。この学校の仕組みでは能力により各スポーツに当てられる。

ただ私の家のように日本文化を重んじる家は大半が日本伝統のスポーツに当てられる。

能力ではなく“家”という理由。それだけで当てられた弓導という世界は私にとって苦痛だった。だが、期待を裏切るように体に馴染み実力となった。

心身共に弓導を否定しなくなったのは去年ぐらいから。

いつもの練習メニューをこなしたら帰るつもりだったが今日はなぜか足が向いてしまったのだ。

毎日夜遅くまで電気がついている体育館に。

ドン、ドン

ボールの弾む音。しかも連続的。ということはバスケット部の子か。

そういえば昇格試験あるとか言ってたよね。

もしかしてその練習かな。レギュラー倍率が一番高いのはバスケット部だし。

それにしても結構夜遅くまでやってるよね。

誰かチラッと見て帰ろうかな。

そつ考え開いている扉から中をのぞいた。

「えっ」

その声に反応したのか中にいた人もこっちを向いた。

天才と私（4）（後書き）

もう一話で天才と私編が終わります。

天才と私（5）

何かを守り抜く為にすべてを投げ出す決意はあなたにはあるか。

私が見たものは・・・・・・・・・・

「野澤先輩」

あの天才だった。

ここで見なかった振りでもしよつかと思っただが無理だと判断した。

「こんばんわ、時田ちゃん」

「変な感じがするので悠理でかまいません」

「じゃあ、私も漣でいいわ」

多分、つられてだと思っけどそう言ってしまった。

基本的に私は他人が何言おうと害がなければいいと感じているから

呼び名なんて気にしていなかった。

それから私が最初から居なかったと思わされるように彼女は練習を始めた。

それならさつさと帰ればいいのに帰れなかった。

だって、彼女が笑っていたから。

「まだ居たんですか」

「結構練習しているのね。私も練習しているけどどこまで遅くやっ
ていないわ」

現在11時。ほとんどの子は寝ている時間だ。

「知ってます。3、4年ぐらい前から遅くまで電気が付いていたこ
とは知ってますから」

「……意外。私が遅くまで練習しているのを知っているの
はあまりいないのに」

だいたいみんなが自主練が終わったぐらいに来て練習してるから。
知っている人なんてほんとにわずかなのに。

「あ、やっと表情が崩れた」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・は？」

『あ、やっと表情が崩れた』・・・・・・・・・・？

今さっきまで自主練の時間のこと話してましたよね？

お願いだから脈絡を考えてください。

「自分、ずっと不思議に思ってたことがあるんです。なんでそんなにうそ笑いするんですか？しかもいつもいるメンバーの先輩たち今まで」

ここで言つつそ笑いというのは愛想笑いのことよね？

もしかして会う前からばれてた？

「ついでに歩く日本人形みたいで怖いですよ。目に感情がほとんどこもってないです。要ちゃんみたいに押し殺しているわけでもなく」

あ、歩く日本人形。ついでに要ちゃんが悠理に会ったときの反応理由はこれか。

って目に感情がこもっていない？どういうこと？

「目に感情がこもっていないって・・・・・・・・・・」

「簡単ですよ。先輩、将棋の駒を見るみたいに選んでいうって意味です。ただ先輩にとっているかいないか関係ないって言う目。自分、その目が嫌いです」

確かに、計算した。彼女は自分にとってどれだけ価値があるか。

もしかして彼女はすべて知っていた。私の考え方も、他人に対する見方も。だから私は嫌われた。

確かに人から見れば最悪な人間だ。

将来こういうことをするとはいえ自分のプライベートまで駒のように定めているのだから。

本当は彼女が怖かったんじゃないかって知られるのが怖かったのかもしれない。

醜く、弱い自分が知られるのが。

「ねえ、悠理」

「はい？」

「私も優希ちゃん達の仲間入りしてもいいかしら？」

「……………」

今度は彼女が絶句する番だった。

「だって面白そうなんだもの、あなたが」

まだ、怖いと思う部分があると思う。

でも彼女なら、“時田悠理”という存在なら信じられる気がする。

心の隅で叫んでいる私がいた。

私を見つけて

転校してきた不良と私（１）

咲き誇った梅を見ながら思い出していた。

あのあと優希ちゃんと一緒に彼女をストーカーした。いや、たとえば悪いので観察したにしておく。

一緒にいることによって微かな表情の変化が読み取ることが出来た。

意外にも彼女は表情豊かだった。

まだ“泣く”という表情は見えていないが笑う、悲しむ、心配する、などの表情を短い期間の中で表してくれた。

ただ、あまりにも微かのため親しくない者には変化が見えないらしい。

そして私と会ってから半年、「姫」という地位につき今日>>こん

にちくくまでそしてこれから私達の目標であり、憧れとなっている。

ただ、「姫」となって数日後に行われた文化祭の時男装して歩いたところあまりにも様になってしまい「姫」という名ではなく「王子」となってしまったのは別の話。

もうすぐ高校生になる。

あと3年と言う短い年月だが婚約者の彼は精神的に疲れることはなさそうだ。

彼が別居を希望するならば希望に沿うだけだが。

ピンポン

そう言えば春の桜祭に出すクッキーの種類を考えたい、そう悠理が言っていたような。

ガチャリと音をたて扉を開けると……………

「
.....
」

ガチャリ

何か見ていけないものを見たような.....

もう一度開け確認すると.....間違いではなさそうだ。

転校してきた不良と私（2）

「これは・・・・・・・・どういうこと？」

完全に引きつっているだろう笑みで彼を見つめる。

彼が入ってからすぐに届いた大きなダンボール箱。すべて彼の荷物らしい。

私の見解と言うかこの流れで言うと・・・・・・・・

「ここで暮らす」

ですね~~~~~

あのお見合いのあと彼のことについて詳しく聞かされた。

霧崎庄吾。

私と同じ年の彼いる地域では名が知れている不良。だが族には入ってはおらず強さは不明。

彼の両親の会社『霧崎コーポレーション』はある時爆発的に売れて

から業績を上げているところである。

会社自体の歴史は長いが大きくなったのは約20年前ぐらい。

私的にはあまり見込めない会社だと思うがあの親だから仕方がない。

それから私が調べたところ彼には有名私立に通う弟が居ること。

私と同じく親とは疎遠なことなどが分かった。

まあ、回想的なものはここまでにしてどうやってこいつを追い出すが先決だと思う。

最悪の場合、マリちゃんに言って要ちゃんとかいつを交換してもらおう。

健次君は嘆くと思うから一週間に3回ぐらい要ちゃんを売れば我慢してくれるだろうし。

うん、我ながらいいい考えだ。

自画自賛しながら、快適生活計画を練っていた。

天才と不良（1）

ピンポーン

玄関のチャイムが鳴った。多分今度は正真正銘の悠理だろう。まずは彼女に紹介するつもりだったからまあいいだろう。

・・・そういえばその不良がいらないような。アハハ・・・まさか！！！！！！

急いで玄関のほうに向かった。

まさかの事態だということだけは避けてほしいと願って。

だが案の定起こっていた。

「ここ、澁先輩の部屋ですね？」

「その前にお前誰だ」

まあ当然の反応なんだけどちょっとかみ合ってなさそうな……

「悠理、合ってるよ」

「そうですか。それはほっとしました。それからこれ、なんですか？」

指を指しながら言う悠理。悠理のいうこれは青筋立ててますけど、どうでしょうか。

「ここで立ってるのもつらいのであがらせてもらいますね」

「どうぞ」

「却下だ」

「……？なんか聞こえたような。」

「あがりたいんですけど」

「言っただろ、却下だ」

な、何で私の前に居て悠理を追い払おうとするんでしょうか。

しかもなんか怒ってるし。

なんか嫌な予感がしてきたのは私だけかしら。

天才と不良（2）

玄関と言う狭い場所で繰り広げられようとする喧嘩を見守る感じとなる私。

もうすぐ春とは言え寒いから閉めてほしいんだけど。

「じゃまです」

先制攻撃は悠理からだった。

「帰れ。そうすればいいだろ」

「先輩に用事があつて来るんです。あなたが帰ればいいでしょう」

「ここは俺の部屋だ、クソガキ」

「ここは澪先輩の部屋です。強姦魔」

いろんな言葉を覚えさせすぎらだろうか。頭が少々痛くなってきた。

今度からは悠理にオブラートに包むと言つことを覚えさせよう。

目の前に広がる喧嘩を見ながら決意した。

「さて二人ともお互いのことも分かったけれどまず、自己紹介しようか」

「はい」

ちよつときつかなあという言葉を使ったと思つがまあいいか。

二人ともおとなしくなつたし。

「時田悠理、漣先輩のひとつ下です」

「霧崎庄吾、これの婚約者」

「先輩はこれではありません」

「てめえには関係ねええだろ」

うぐつと言つ効果音を交えて悠理の言葉がとまった。

確かに悠理論からするとこれは私達の問題とされる。悠理は普通突っ込まない。

むっつというように口を尖らせた後私のほうに向かって抱きついた。

・・・抱きついた？！

天才と不良(3)

ゆ、悠理が抱きついた。

今私の中にあるのはそのことだけだ。

そもそもこの子は甘えることがない。

というか甘え方を知らない。

だから他人と一歩後ろに居ることが多い悠理が……

か、可愛すぎなんですけど!!!!!!!!!!!!!!

今これ以上ない幸せに私は嬉しかった。

でも幸せは続かなくて……………

バッシン！！！！

鈍い音が響いた。

「いっつ」

「っ」

そして鈍い痛みが襲った。

といってもそこまで痛くない。

だが一番痛いのは悠理だ。

もちろん犯人は・・・・・・・・・・

「悠理大丈夫？」

「はい、大丈夫です」

「そう、よかった。で、何で叩いたの？」

「別に」

「別に済まされる問題じゃないの」

「どうでもいいだろ」

そうどうでも良さそうに答える婚約者。

せつかくの幸せ壊しあがって・・・・・・・・

「帰ります」

しばらくの険悪の中動いたのは被害者の悠理だった。

「えっ？別に悠理は帰らなくても」

「いえ、お邪魔しました」

そういつて玄関に向かう。彼女を引き止めるようなことはないからここで私も何も言わないでおく。

ただお見送りはする。

今回の不祥事はあいつのせいだけど婚約者と言う立場になった以上私にも責任があることになるからだ。

無言で歩く廊下ではため息が漏れそうだ。

「先輩お見送りありがとうございます」

「ううん。ごめんね、悠理。痛かったでしょう?」

「このぐらい平気です」

「本当?腫れてきたらすぐに保健室行きなよ?」

「分かりました」

と言いつつも多少の痛みは気にしない子だから明日見てやばかったら引きずっていいこと。

そう、心に留めておく。

「先輩、あの人面白いですね」

聞き流していた悠理の言葉の真意も聞かず私は自分の世界に入っていた。

天才と不良（4）

ボタンッと扉が閉まった。

さて、あいつを帰らすか。

私の幸せを壊した恨み、味わってくれるや。

私は怒ると今までにないくらい笑顔になるらしい。

要ちゃんいわく『ブラックスマイル』

「帰ったか？」

結構あからさまなのか私が怒っていることに気が付いたらしい。いや気づかなかつたら困るが。

「ええ、帰ったわ」

今からあなたも帰ってもらうけど。そう裏もこめて。

「さ、さって荷物でも」

「その必要ないわよ」

「は？」

「最初是要ちゃんと部屋変わってもらってもらおうかなと思ったんだけどね。健二君も外部から転校してきたし。だけど、もういいよね？」

「え」

「出てってくれる？」

「ここ俺の部屋」

「私の部屋。お前に拒否権はない」

有無も言わせないという押しが効いたのか彼は無言で出て行った。

・・・・・・・・・・・・・・・・意外にあっけなかったわね。

手でも出してくるのかと構えてたけど。

あゝあ、華音ちゃんなら楽しいのに。

本当に出て行くとは思っていなかった彼の姿を思いながら廊下を見ていた。

不良と愉快的仲間達（1）

「こ、怖え」

あいつ、ただもんじゃねえぞ。まあ、はなっから知ってたことだけ
ど。

でも、あれはやばかった。

不良の勘と言うか、本能と言うか。

自分の体が警告を出していた。

・・・・・・・・・・そう感じている俺は霧澤庄吾。

同居予定だった婚約者に追い出された男。

別にあの女に言われたからではない。

ただ危険がただけであったのとガキと女は殴らない主義だからだ。

まあそれはいいとしてここはどこだ。

あの部屋から飛び出してきたのはいいとしてこれからどうしようかと言っ問題もある。

あの女があそこまで怒った理由も見当が付いている。

ただどこっちのことも気にしてほしいものだ。

たとえあいつらがカレカノという関係でもあっても。

………それって一種俺に対するあてつけだね。

親からの命令を達成する前に俺がやめそうだ。

「はあ」

こうなった元凶の女、野澤漣のことを知ったのはあの見合いの一ヶ月前。

久しぶりに本館に行ったときだった。

「彼女とお見合いをして彼女から多くのお金をこっちへ回すように
仕組みなさい。」

そのぐらいのことなら役に立たないあなたにでもやれるでしょう。

でも失敗したらそのまま帰ってこないで。

一家の恥だわ」

実の親とは考えられない言葉を俺に浴びせる母親。

父親のほうはまた女のところにでも言っただろう。

だがこれが何年も続いているせいかなんとも思わなくなっただ。

「母さん、俺がお見合いしたいよ」

「そうしたいのは山々なんだけどね、あの家には弟が居るのよ。」

でもあなたならこの女よりもっといい女が見つかるわ」

彼女が本当に聞いていたら起こるだろうと言う言葉をぞくぞくと。

まあどうでもいいかとほっかっておいたら後日とどいた詳しいこと。

見た瞬間俺は悟った。

こいつも俺と違う異次元の ニンゲン。

ばんばんと書き連ねている優勝と言つ数々。

何もないと言つ俺とは違う。

だが、会つてみたら。

「アハハハハハハ、笑える……」

目の前に居る女はだたの女に変わりはなかった。

それからこの学校、帝楠学園に入学させられ今に至るといふわけだ。

俺のほかにも外部入学者がいるらしいが関係ない。

俺は独り。今も、過去も、これからも。

不良と愉快的仲間達(2)

気づいたら食堂みたいなところについていた。

と言うかよく見てみるとどう通っても学校に行くためにはここを通らないといけないようになっていたらしい。

まあ、そっちのほうが無効率的にいいからな。

そう思っているとなにやら食ってるやつが。

ユウリだ。

「なにやってんだよ」

「食べてるんです」

見れば分かる。

「あなたのせいで台無しじゃないですか」

そついうユウリはぐだぐだと話し始めた。

「桜祭に出すクッキーを試食してもらおうと行つたのにあなたのせいでその話すら出来なかつたし、

帰つてみたら数個誰かに食べられてたし。散々ですよ。

嫉妬するのはかまいませんが被害を作らないでください」

ちよつと待て。こいつは何を話している。

前半のほうはなんとなく分かつた。

ただ後半は何を言つてるんだ。

確かにあの女とは婚約者となつた。

だたそれは紙の上での話。実際はただの他人だ。

なのになんで嫉妬と言つ言葉が出てくるんだ。

もしかするとこいつは政略結婚という話は聞いていないのか？

「知ってますよ」

「わぁ」

こゝこいつ人の心が読めるのか？

「馬鹿言わないでください。口に出てましたよ」

「そ、そうか」

なんだ、そういうことか。

「……気づいてないんですか？」

判断するような目を向けるユウリになんとか嫌な気持ちになった。

不良と愉快的仲間達(3)

それからユウリはべらべらとこの学校のことについて話し始めた。

まあ生徒手帳以外のことを聞くのに一番いい方法は生徒だから気にしないが。

人通り聞いてこの学校は本当に違う学校だということに今更ながら知った。

まず、“ f i v e ”の必要性から聞きたい。

天才をまとめたグループの名前。どこの宗教だ。

まとめる必要性があるのか。

ついでの話、あの女、ユウリ、カナメマユコ、あと俺と入れ違いに出て行った2人で今の“ f i v e ”だったらしい。

意味が分からん。

まあ子供の教育に熱を入れていることはいいことだと思うが。

いろいろと話を聞いているとき学校側の廊下から声が聞こえた。

「麻由子〜〜〜」

「死ね」

なんか騒がしそうな2人が来たようだ。

これに関してはユウリも頭を抱えている素振りを見せた。

不良と愉快的仲間達(3) (後書き)

やっと出てきた、うるさい二人。名前ばかりの登場ですみませんでした。

不良と愉快的仲間達（4）

要麻由子、夏木健次。

この2人の第一印象はバカカップルだと思う。

そう言わざる終えない。

「霧澤庄吾。野澤漣の婚約者だ」

「ああ、例の漣先輩の婚約者」

「意外に普通だ」

お前らの言葉にびっくりだよ。意外に普通って。

コイツら不良を見たことないのか？

……………そう言えばここは寮生活だったな。

まあ、そんなことはどうでもいい。

この状態はなんだ。

このふたりが来たたん人が集まってきた。

特に女子。

聞き耳立ててると・・・・・・・・・・

「誰、あれ？」

「新入生じゃないかな？」

「でも“姫”がいる」

「もしかして知り合い？」

「さあ」

“姫”？

なんだそりゃ。

こそこそ話を聞いたのか要が夏木に何かを促すようにしている。

そして・・・・・・・・

「悠理、まず、遷先輩のところいかね？」

大騒ぎになってるみたいだし」

「このままだと話しにくくなるよ」

そう、提案してきた。

「あ、そうしようか」

おい、まで。

俺、今戻ったら殺されるんだけど。

ユウリに必死の思いで願った俺だった。

不良と愉快的仲間達（5）

現在、このカップルの部屋に居る。

俺の必死の視線に気づいてくれたユウリはあいつにメールして俺と喧嘩（？）していることを知ってこの部屋へと移動した。

つくりはほぼ一緒。

ただ家具の位置などが違うだけ。

1LDKに付いてそんなキッチンでお茶を用意している要が俺に話しかけた。

「というか何で喧嘩したんですか？あの零先輩が自分から無駄な喧嘩をするなんて相当ですよ」

後輩に“あの”をつけられてるってどんだけ平和主義なんだ、あの
お嬢様は。

「多分、叩いた事だと思う」

それは分かっている。でも俺にも訳がある。

「澪先輩を叩いた?!」

「いや、こいつ」

誰が好きで女を叩くか。女と子供を叩く奴は嫌いなんだ。

「・・・悠理、からかったの?」

探るような目を向けながら話す夏木。

「うん、楽しそうだったから」

「は?」

おい、待て。どういうことだ。

「先輩が怒った理由をご説明します」

無表情だがどこか楽しそうに話すユウリを見る。

「よく、名前を見ても間違えられるんですけど、女ですよ」

・・・。

「ついでに女を叩いたのも理由のひとつですが、自分、一応バスケット部のエースなんで腫れたらどうするのっていうのもあったと思いますよ」

俺はとんでもない間違えをしたらしい。

不良と愉快的仲間達（6）

俺はこの世で馬鹿な人間かもしれない。

知ってたけど。

でも、女と男を間違えるなんて最低だ。

あの後俺は放心状態に陥った。

でもどこかで冷静な俺がいたから完璧に放心状態だったわけではない。

あのカップルが気を使って慰めてくれたことも分かっている。

あの時の俺があの子のことを好きという発言の意味も分かった。

だが、本気でお前紛らわしい。

時田悠理。

名前も男っばいこいつは正真正銘の女だった。

一応去年までは髪は長かったらしい。

それをばっさり切ったとたん髪が伸びるのが遅くなっただけらしい。

ついでに服は上の兄貴達のお下がりのらしい。

たまに器用な2番目の兄が作った服を送ってくるらしいが着る気はないらしい。

そして俺はもちろん悠理に謝った。

間違えていたこととたたいたことを。

まあだましてたからっということと許しをもらえたが。

問題はあの女だ。

俺が謝ったと言って部屋に入れさせてくれるだろうか？

いや、ないだろう。

でも荷物は部屋にある。

あけるかあけまいか・・・・・・・・・・

ドアノブにかけたとたんガツチャッと開いた。

開いた?!

ドンドン

音を忍ばせてはいるつもりだったがそんなの関係ない。

あの女意外に馬鹿だ。

リビングにつながる扉を開けると叫んだ。

「おい!!!!」

案の定女は夕食の準備をしていたらしい。

「な、なに?」

「なんでドアに鍵がかかってないんだよ。」

お前、誰かが入ってきた時どう対処するつもりなんだよ。

今の時間帯は人が起きているからいいが深夜とかに入られたらひとたまりもねえぞ。

お前が思ってる以上に男の力は強いし恐怖で声が出ないこともあるんだからな」

「えっと、まずお帰り」

「……………だめだ、こりゃ。」

「それからこの学校で私を襲おうとする人間もいないし、庄吾が入ってこれないと思って」

自分で鏡見ろ、鏡。

その容姿のどこがブスなんだ。その辺の女よりも倍以上綺麗だぞ。

「……………庄吾って。」

「あ、結婚するのに霧崎君じゃおかしいし、どうせならって思ってた呼び捨てにしてみたけど嫌だった？」

「嫌というか……………」

嫌われてるから名前すら呼ばないかと思ってた。

「あ、私のことはどう呼んだってかまわないから」

「いや、そういうわけには」

「ぎゃあぎゃあ文句いつかもしれないけど悠理にも言っとくし」

「だから」

「でもその前にご飯が冷めちゃうや。早く食べようか」

ああ、もう。人の話を聞け!!

「零!」

「ん?何」

この時初めて彼女の名を呼んだ。

この時俺は想像もしていなかっただろう。

ただ漠然と生きて生きた俺がたった一つのものを守りたいと思うなんて。

過去をそむけ続けてきた俺が向き合っ日が来るなんて。

不良と新学期

4月

校庭に咲き誇った桜は新入生を歓迎し、進学したことを祝っているようだ。

「あゝ、たま痛え」

「徹夜するからだよ」

本日入学式兼課題テスト

貰うのが遅かった俺は徹夜して完成させた。

言っておこう。

ここの頭の良さはハンパない。

完全にこんなのでたか？っていう世界だった。一応、これでも勉強してた方だが。

もちろん、テストなんて惨敗だ。

「多分、赤点はないと思うし滑り込み入学したからある程度見逃してくれると思うけど……………」

酷いよ、これ」

メモ代わりとして書いた解答をみながら言う漣。

へーへー頭いい奴にはかないませんよ。

実際、課題の9割を教えて貰って感謝しているから言えないが。

「漣先輩」

「あ、悠理たち」

声をした先を見ると場違いな奴ら3人。

というか入っていいのか？

普通、いかんだろ。しかももうすぐ昼休み終わるし。

「テスト、どうでした？」

てめえら一回ぶん殴っていいか？

「……………恋人届け？」

「そんなのあつたねえ」

なんの届けだ。婚姻届けの仲間か。

話の中身を簡単に言つとゴタゴタ防止策らしい。

まあ、子供が出来ました……って言われたら大問題だからな。

「要らないでしょ」

「確かに要らないな」

紙の上の婚約者ではあるが事実上の恋人ではない。

そんな雰囲気になることはない気がする。

いや、ならない。

ズキンッ

なんだこれ。気のせいかな？

変な痛みには違和感を感じる。

「つまらない」

「そうですよ!!」

中坊三人組の抗議の声を聞きながらこの痛みの元凶を考えていた。

不良と一通の手紙

「は」

「だから……」

「はあああああああ」

5月。

入学式から1ヶ月。

成り行きもなく漣の口から出た言葉が俺に衝撃を与えた。

「いいじゃないですか。漣先輩のおばちゃん家の和菓子、ものすごくおいしいですよ」

「いや、そういうわけじゃないだろ悠理」

「うん、お婆様が喜ぶ言葉だけど」

やっぱりここはお嬢様言葉か。

心につっこみながらもこうなった成り行きを整理する。

事の始まりは一通の手紙からだった。

澪宛てのきれいな便箋の手紙で送り主は野澤桐恵。

澪の祖母からだった。

その内容はあいつらが決めた婚約者、要するに俺を連れてゴールデ
ンウィークに泊まりに来说いと言うもの。

ぜって 嫌だ。

俺に対する嫌がらせか？

「じゃあ、2人の家に行けばいいじゃないですか」
「だが、そういう問題じゃねえって。」

「……………でも庄吾の家、行ってみたいなあ」

……………澪まで乗るな。

こうして、澪の祖母の家、俺の家（一家の別荘）に一泊二日泊まる
ことになった。

「お土産、期待しています」

「お前、ぜってえ楽しんでるだろ」

不良と漑の（祖父母の）家（1）

ゴールデンウィーク1日目。

俺は初めて今年のゴールデンウィークが5日もあることを呪った。

「ぜってえ俺、場違いだろ」

「え、大丈夫だよ」

お前がよくても俺はよくないの。

でかい日本家屋の屋敷の前にして俺は重いため息を吐いた。

「お婆様、お久しぶり」

「漑、お久しぶりね」

なんと品物のよさそうなばあさんが出てきた。

多分、雰囲気はあのすれ違った漑の母さんよりもこの目の前にいる

婆さんのほうが似ている。

「で、この方が」

「うん、庄吾だよ」

「はじめまして、霧崎庄吾です」

にこりと優雅な笑みで俺に微笑んだ。

「はじめまして。零の祖母の野澤桐恵です。」

ふふ、そう硬くならなくてもいいのよ」

「あ、はい」

硬くなるなっていうてもなっちゃんだよ!!

もう帰りたい。俺には完全に合わない。

まだあの学校のほうが慣れる気がするのに。

「で、あなたはどつするの?」

そう言つと後ろの壁から爺さんが。

“あなた” って言ってるからこの人の夫で零の祖父に当たるんだよな。

「あいつらが決めたもんなんぞ俺は認めん」

まあそうですね。

もともとはあなたのものなんですから。

いや、代々の野澤一族のもんか。

「うん。でもですねえ。彼は関係ないでしょ」

「それでもじゃ。」

その若造。今回は客人として認めるが親族としての入室は認めんからな」

えっと、俺はどういう反応を……

「若造、返事!」

「はい!」

何で俺はこうなってるんでしょうか。

早く明日になれ！！！！！！

不良と湊の（祖父母の）家（2）

「でね、悠理が……」

「そう、悠理ちゃんが」

俺、いる意味最初からないですか？

話す人間もいなくて湊の祖父母家を散策中。

普通はしないんだけど、あまりにも暇だ。

ついでに久しぶりの再会を邪魔しちゃいけないだろ。

するとばたたと走ってくる小学生。

・・・誰だ？

「お兄ちゃん誰？」

「え、あ、俺？」

「それ以外誰がいるの？」

まあそうだよな。周りには誰もいない感じがする。

「霧崎庄吾。庄吾でいい」

「近藤豊！！おばあちゃん達に会いにきたんだけどいないの」

「おばあ、ちゃん？もしかして桐恵さん？」

「うん！！」

漣の・・・従弟らへんか？

近藤って言ってるし。

「おい、餓鬼。誰に許可なく入った」

「お・・・じいちゃん」

「お前をわしの孫とは認めとらん」

え・・・・・・・・・・どういうことだ。

孫なのにかわいくないのか？

いや、普通、自分の孫だったらかわいいもんだろ。

「うるさいですよ、あなた」

いつの間には言えるほど後ろに漑と桐恵さんがいた。

「あ、漑おねえちゃん」

「豊、お久しぶり。元気にしてた？」

「うん、がんばって勉強してるよ」

「そう」

は？どういうことだ。

豊は野澤ではなく近藤を名乗ってたぞ。

しかもこのじいさんは豊を認めないとも言っている。

もしかしてこの家も俺の家よりもごたごたがあるってことか？

そういえば漑は弟がいるという理由で次期後継者を降ろされたんだ
つけ。

まったくわからない。

なんだか俺は踏み込んではいけない領域に踏み込んでしまったよう
だ。

不良と漣の（祖父母の）家（3）

「ごめんね、豊の周り、こういうの頼める歳の人いないから」

「庄吾、もつと！！」

「それはいいから、豊、降りろ。俺は限界だ」

「ええっ！？さっき乗ったばかりじゃん」

「何回乗ってあがる！！」

俺は豊の遊び道具となっていた。

もしかしてここのところだけ姉弟ともに似てねえ？

完全に人使い荒いとかか。

それからおいしい料理（3時に和菓子が出て来たがかなりおいしかった。うん、悠理の言ったことに少しはうなずけた）を食べ、漣は

豊を寝かしつけに行った。

現在俺は一人。

なぜ豊一人なのかというと澪の現両親も認められていなく豊だけでも認められないと私に回ってきてしまうかららしい。

俺の親もそうだがこいつの親もいろいろと大変そうだな。そう思う。

別に澪でもいいと思うが。

こいつ何気に天才だし。

「それにしても、なんだかんだ言っただけ俺の位置すごいことになってない？」

布団がしかれている。

うん、ベットじゃないのは想像出来たけど……………

「並べられてとは思わなかった」

しかも隙間もなく。

これを見た澪も苦笑いを溢していた。

現在10時。豊が駄々をこねて一緒について行ったのは9時。

一緒に寝ちまったのか？

……別に漣と一緒に寝ることを期待してたわけじゃなくて暗いから心配というか、なんと言つか。

ああ、もういいだろ。俺の馬鹿！！

「夜風に当たってこよ」

誰もいないのに俺はつぶやいた。

漣の庭は教科書に載っているような日本庭園のようだ。

少しはなれたところには桐恵さん専用のビニルハウスがあり、そこで育てるのが難しい花とかも育てているらしい。

簡単に言えば落ち着くってことだ。

俺に家は芝生や、木はあるが花はそこまでないから結構殺風景だ。

少し離れた花壇に行けば別だが俺にはそんな趣味はない。

「おい、若造何しておる」

「へ、あの」

なんでこんなときにこの人に出会った。

出来ればようやく緊張しなくなった桐恵さんの方がよかった。

不良と漑の（祖父母の）家（4）

えつと緊急事態です。

一刻も早くここから退出する方法を考え出したいです。

「ふん、若造にしてはこの庭のすばらしさが分かるのか」

「すばらしさというか……」

落ち着くから来ただけなんだけど。

漑の祖父、源次郎さんは涼んでいる俺を見つけそのまま去っていくのかと思いきやそのまま隣に座った。

で、現在どうやってここから離れるか模索中。

初めから俺はいい印象じゃなかったみたいだし何か言われると思うと怖い。

……俺は何を言われることを怖がってるんだ？

家？俺？それとも……

「お前さんとも大変そうじゃな、霧崎庄吾よ」

「え？」

は、初めて名前呼ばれたよな。

「実の両親とは10歳のときから別居し、小、中ともに親代わりとしてきたのは使用人だったそうだな」

……なんでそれを。

「詳しく見るとそれから両親に会ったのは澪と会う見合いの前以外ないとのこと」

「それがどうしたんですか」

自分でもびつくりするほど低い声が出た。

「庄吾よ、霧崎家の駒をやめる勇氣はあるか」

は？この人は何を言った。

駒をやめる勇氣はあるか？

普通、漣の婚約者やめるとか自分の家帰れとかだろ。

なんで・・・・・・・・・・

源次郎さんはゆっくりとこっちを向いた。

「境遇はお前さんと漣はよう似とる。

ただあの子の境遇はわたたちの判断の誤りからじゃ。

だからもう判断を誤ってならぬ」

「なら普通は」

「最後まで聞け若造。

だがお前さんの境遇を知ってお前さんだけは貶めようとは思わんだ。

むしろ残り短い老いばれ当主の最後の仕事として片付けたいとさえ思う。

じゃがここでお前さんに漣の婚約者を辞めてしまったのならば助けにくい。

ならどうするか」

「・・・・・・・・俺自身も行動をする、ですか？」

「もちろん澪も協力を依頼する。きっと力になるだろう」

「澪にも・・・・・・・・ですか」

「あの子は野澤家の歴史の中で最も繁栄させることのできる経営者の技術を持っているからな」

ズキツとした。何故か。分かっていることなのに。

俺は・・・・・・・・澪や、あいつと違って落ちこぼれということなんて分かってるのに。

不良と漣の（祖父母の）家（5）

「お爺様」

「漣、こんな時間に何しておる」

「何って豊を寝かしてただけだけど」

「はぁあの餓鬼なんぞ使用人に任せとけばよかるう」

「私の弟にそんなこと言わないでください」

「俺は認めてはおらんからな」

「はいはい」

話に夢中になって気づかなかったが漣が戻ってきたようだ。

「で、聞いておったのか、漣」

「あ・・・ちょっとね」

もしかして少し前からいたのか。

「……………俺の過去も聞いていたのか？」

「すぐに資料を送る。作戦完了は三年後かな」

「三年後……………だいたい卒業する辺り」

「あせらんでもええ。これはひとつずつゆっくり確実にやりなさい。

特に庄吾、おまえさんのはな」

「はい」

もしかしたら俺は今日一日でいい人たちにめぐり合えたのかもしれない。

「気づいたらもう日付が変わってたんだな」

「そうだね。豊と久しぶりに会ったから話し込んでてなかなか寝てくれなかったんだよね」

「そうなのか」

「うん。最後は文化祭かな」

ゆっくりと歩きながら俺と漣は話していた。

いつもならさっさと置いていくのになぜか今だけは小幅をあわせて歩いていたいと思っっている自分がいる。

いや、正確にはこれから寝てしまうのが惜しいくらい。

「明日は一旦帰ってそれから庄吾の家だね」

「ああ、一応連絡してあるから大丈夫のはずだけど」

漣を気につてくれるか心配だ。

竹井とか俺の家で長年働いているから人の隠れた本性暴くの得意だしな。

そう思っていると部屋に着いたようだ。

いつもより早くついたような気がしたのは気のせいかな？

「庄吾」

「どうした」

「頑張るから」

「瞬間を？」と思ったがすぐにあのことだと思い

「ああ」

そっけないような返事をした。

でも澪はうれしそうに笑って一歩先に部屋へ入った。

一時帰宅と天才

あの二人が帰ってきたのは昼過ぎだった。

どうも先輩の弟、義をつけるのかどうかは判断しにくいあの少年と話していたらしい。

しょうがないことだけでも、あまりあの弟が好きでない。

いや可哀想という感情しか出てこないのもあるけども。

先輩が先輩でない時期はとつても見ていて痛々しかった。

何も思わない、何も映らない、まるで日本人形のような存在。

私がそのことを指摘してからはそうでもなくなったけれど。

時々、人に見せないところでやる冷たい目は誰もどうすることもできなかった。

でも今は・・・・・・・・・・・・・・・・

「悠理、お婆様がねこれ」

「こんなにたくさん！！！！」

「よろこんでたよ」

そう私の好きな笑みを見せる先輩。

ふわっとしてこっちまで嬉しさを感じさせるような笑みは本当に好きだ。

「重てえ」

「お疲れ、庄吾」

「これは俺に対する嫌がらせか」

「だって」

「お願いだから豊を遊ばせた後はやめてくれ」

「女の子にこんな重たい荷物持たせるの？」

「それは……………」

見た目の反して女、子供を大切に扱うこの人にとってはその行為は考えられないものである。

なんというかこいつらのためなら死ねるって言うアクション映画み

たいな主人公。

まあ実際私の周りにも子供のため（特に恵まれない、複雑な家庭事情がある子供）に人生捧げてますって言う人がいるから何も言わないだけ。

あの人の場合、度が酷いんだよね。

たとえば馬鹿馬鹿しく思える行為ばかりするあいつのせいだとしても。

……話がずれた。

今は楽しんでいる先輩をどう止めるかだ。

「豊喜んでたし結果オーライって言うもんだよ」

「喜んでたけどさあ」

このブラコンめつと聞こえたのは無視しようか。

「あ、悠理」

「はい」

「庄吾の家から帰ってきたら話しあるからいい？」

「はい」

そういうとふふつと笑いながら庄吾先輩と一緒に部屋へと戻っていた。

先輩、今どんな顔しているか分かりますか？

ふと見ると冷たい目をした人形のような表情が、人を判別する氷のような視線がまったく違うものになっているんですよ。

どう表せばいいのか分からないけれど。

たとえるなら健次が要ちゃんにだけ見せる表情と、気取っている奴が優菜をみる慈しむような視線と同じなんですよ。

そして庄吾先輩も。

ただ二人とも気づいていない。

出会う方は間違っているけれども今はただ彼らに幸福が訪れるように努力するだけだ。

私と不良の家（１）

「庄吾の家は洋風なのね」

「まあな」

無事庄吾の家に到着した。

海が近くにあるらしいことやこの家は現在はあの親の別荘となっている事などを庄吾から聞いた。

ただの興味本位。

たったそれだけのことなのにわくわくとするのはやっぱり他人の家だからだろうか。

基本洋風の家なんかに入ったことは少ない。

寮生活をしているためかまずそうそう他人の家に上がることなどないからだ。

もうちょっとおしとやかにしないとなあ。

「お帰りなさいませ、庄吾坊ちやま。

ようこそいらつしゃいました、野澤澪様」

扉の向こうに待っていたのは数人の生のメイドさんと一人の年配の人。

歳は40代後半。

ここの取締役のようだ。

「ただいま」

「お邪魔します」

そう言つて上がる前にてきぱきと仕事をしているメイドさんたち。
なんか慣れない。

部屋を案内してもらつて客間に入らせてもらった。

一気に静かになる空間。

客間なのか装飾品がかなり豪華だ。

ただ現在の私にとっては結構憂鬱なもの。

基本質素な生活をしている。

可愛いものは好きだけど派手なものは嫌いだから。

『女の割にはこざっぱりしてるよな』

私の部屋に入ったときの庄吾の反応。

女の子の部屋に入ったがある発言されてむかついたのを覚えている。
だからあちらとしてはもてなしなのだろうけどこっちは落ち着かない。
い。

しょうがないか。もともと洋風の家なんだし。

豪華な装飾に彩られた部屋をもう一度見るとため息をつくのであった。

私と不良の家（２）

現在お庭を散策中。

前には庄吾が居る。

お昼までには時間があるのでお庭を散策してくださいって竹井さんが。

あの人、客人しかも女の人のツボを分かっている。

だって客室を通るときずっと庭のほう見てたの分かってたみたいだし。

色とりどりの花が咲いている。

配色もきれいだし結構手間暇かけていることが目に見える。

誰がやってるんだろう。後で聞いてみよう。

「澪はさ」

「ん？」

「親と離れてても寂しくはないのか」

後姿しか見えない庄吾の背中はどこか儚さを感じられる。

「うん、感じたことはないよ。みんなが居るし先生たちも結構遅くまで居るから話相手してくれるし」

それしあの家にとってもう私は部外者だから。

花を見る振りをしながら自虐的に笑ってしまう。

初めはいやいやだったあの場所がいつの間にか救われる場所になるなんて小さいころの私はそんなこと思わなかっただろう。

いや思はずなかったんだ。

あんな事故が起きるなんて誰も予想しなかったんだから。

「遷、どうした」

「え？」

い、いつの間に私の隣に居たの。

「かぶれたのか？それともなんかあったのか？」

「ど、どうしたの。急に」

「お前、泣いてるんだぞ」

えっ。

驚きつつも頬を触る。冷たい水滴がついたことが感じられた。

私、泣いてたの？

「大丈夫か？」

心配そうに見つめる彼がなんだかおかしくて。

「大丈夫、目にごみが入ったみたいだから」

見え透いた嘘をついた。

ただあまりにも見え透いた嘘だったのがいけなかったのか。

「帰るぞ」

「え」

「いいから帰るぞ」

そう言っただけでずるずると屋敷のほうへ連れてかれた。

もう、心配しすぎだてば。

私と不良の家（3）

あの後泣いている私を見たメイドさんたちが二手に分かれて、私を心配して部屋でいろいろ（お茶とか）してくれて一緒に居てくれた人たちと庄吾を攻める人たちになった。

庄吾は何も悪くないんだけどなあ。

ちょっと悪いことしたみたい。

「お加減はどうですか？」

トントン

軽くドアを叩かれた後入ってきたのは竹井さんだった。

「大丈夫です。みなさん心配しすぎですよ。

目にゴミが入っただけなのに」

「いらして下さったお客様第一として働いてますので」

なんか変な言い草。

見ただけで分かる。

ここで働いている全員が庄吾第一と思ってる。

「竹井さんはこのナイトみたいですネ」

笑って半分冗談で言ってみた。

「まあ、そうですね。ここを守るの私の使命ですから。

澪様は澪様だけのナイトがいらっしやいますか？」

まさかこんな風に返されるとは思ってたなかった。

私はむしろあの場所では……………

「私がナイトなの。あの学園のたった5人しか居ないナイトのうちの一人。」

あ、いや、姫が居るから4人か」

ふふつと笑って答えると答えが違うのか一瞬ゆがんだ表情を見せた。

「そうではなくてですね……………」

差し当たりのない言葉を搜しているのか苦笑いを浮かべている。

もしかして私のナイトって彼氏のこと？

「それし私、全然モテないんですよ？」

バレンタインも後輩たちからもらってますし」

そのことを言うと驚いた表情を見せた。

そういえば庄吾もそのことを言うと驚いてたっけ。

何で驚くのかなあ。

私、結構容姿は平凡なのに。

トントン

控え目に叩かれた音で分かる。

庄吾だ。

「俺だけど入ってもいいか？」

「うん、いいよ」

キーッとゆっくりと扉が開き庄吾が中に入ってきた。

「あ、竹井居たのか」

「すぐに退出いたします。」

「澪様、お食事ができましたらお呼びいたします」

「ありがとうございます」

「一礼すると出て行ってしまった。」

「あ、のさ。落ち着いたか？」

「大丈夫。ここの人たち、いい人ばかりね。」

「偽った心配なんて見えなかったもの」

「まあ澪のこと気に入ったみたいだしな」

「ほんと?!それなら嬉しいな」

「お茶のおいしい淹れ方ほんの少し教えて貰ったけどすごく分かりやすかったし、まだお花の育て方聞いてないんだよね。」

「お婆様は温室でしか育てないから分からないし。」

「ここだと気楽に話せる人がいっぱい居るみたいだからたくさん話し

たいなあ。

勝手にここの侵略（？）計画に花を咲かせている私だった。

「漣、自分の世界に行かないでくれ」

私と不良の家（４）

夜、俺は自分の部屋で星を見ている。実際は考え事をしているのだけれど。

トントン

「竹井か？」

「はい、そうでございます」

そついうと音も立てず入ってきた。

相変わらず物音を立てず静かに入ってこれるよな。

「澪様はお部屋で使用人どもと話しております」

「澪らし」

笑って答えると複雑そうな顔をした。

「澪様は何を思っているのか分かりません。気をつけなさいませ」

「ああ、まあ分からないな。」

でも漑は悪いやつじゃないよ」

ただしSっぽいところはあるけど、その言葉は飲み込んでおく。ただ竹井は複雑そうな顔のまま。

「それと、漑様に自分自身がどれだけお綺麗か理解されるようお努めください。

彼女の場合は口で説明してもお世辞と解釈されてしまうでしょう」
確かに鍵をかけなかった事件からあれこれ過ごしてきたが全く自覚がないことは分かった。

一回あいつらに相談したが無理だった。むしろ遊ばれた。

『庄ちゃんが毎日綺麗とか言えば自覚しますよ』

完全に解決策じゃない。俺に毎日こんな言えると思っているのか？

健次じゃあるまいし俺は言えねえっての。

数々の類似事件を思い出したため息をついているとまたドアから物音がした。

「漑様でございますね」

「え？」

竹井の言葉にびっくりしながらもあつちからの声を待つ。

そして

「私だけ入っていい？」

漣の声がした。

エスパーになったのか？

「入られますか？」

「え、ああ」

竹井はドアを開ける。

もちろんだけど漣が見える。

「あれ竹井さん。もしかしてお話中だった？」

「いいえ、今終わったところでございます。」

すぐ退出いたしますのでごゆっくり」

そのまま漣を通すとボタンと閉めて行った。

「ごめん、なんか邪魔しちゃった」

そばにあったソファーに座るとシユンとした表情を見せた。

「いや、ほんとに大丈夫だから。

それよりさ俺、漣に部屋教えたっけ？」

一瞬思ったことを口に出した。

「え？ううん。玲美さんが行って来てくださって案内してくれたの」

「へ、へえ」

あいつらか・・・・・・・・・・

「意外とシンプルなんだね」

部屋を見渡して言う漣。

ここに入った人間は両手に数え切れるほどしか居ない。

特に女となるとほとんど居ない。

だからなのか恥ずかしい。

「庄吾の部屋、いつも汚いのに」

「・・・・・・・・入ったことあったの？」

「うん、いつも入ってるよ。あれ気づいてなかった？」

朝、起こすとき揺すってるのに」

そう言えば起こしてからちょっと経って起きてくるね。

笑いながら話す澪を見て凍りついた。

うん。帰ったら掃除しよう。絶対しよう。

新しい事実を知って決意を固めたのであった。

私と不良の家(5)

それから学園に帰ることになった。

ものすごく溼に対する見送りが手厚かった。

すみません、ここの主人俺ですよね？

「こんなにもらえるとは思わなかった」

きやあきやあ喜びを表す溼。

珍しく俺の歳相応の反応を示している。

まあそんな反応されるのなら夏休みとかに行きますか？

「今度来たら紅茶の葉の名前とかを教える約束したの」

ふふ楽しみだなあつと漏らす溼に悪いがやっぱりさっきの件は削除することに決めた。

俺を知るために行くならいいが今度行ったら完全に使用人たちと遊

ぶに違いない。

俺すごく暇なんだけど。

女子だけに俺が入れるわけ無いだろ。

はぁっとため息をつきながら外を見るともうそろそろ着きそうだ。

「ありがとうございます」

丁寧な礼をいい降りた後去っていく車。

ここからは地位も財産も関係ないただの生徒だ。

そう思っただけと歩いてたのに・・・・・・・・

なんでここに居やがる。

名門中の名門に行ったので休みなんてほとんど無い。

たとえ休みだろうと平日だろうと将来のために勉強してるはずなの

に。

「やあ、お久しぶり。兄さん」

なんでこいつが居やがるんだ。

不良と弟

最初っからおかしかったんだ。

俺に対して何もしなかったのは。

母親も、こいつも。

なあ、行かないでくれ。

「へえ、湊中なの」

「はい、来年は黒沼高校へ行くつもりなんです。

あそこは名門大学の進学率がいいですから」

こいつがやってくるとは思わなかった。

霧崎和真。正真正銘の俺の弟。

そしてあいつらの会社の次期社長。

多分零のことを気になっていたはずだから見に来たのだと思うが。

まさかここまで演技するとは思わなかった。

「今度は俺たちの実家にも来てくださいね。」

母さんたちも喜びますから」

「あ……都合がつきましたらお電話させてもらいますわ」

「と言いますと何かございますか？」

「これからいろいろと忙しくなるので。高校生は特に」

漣の念押しに負けたのか、お待ちしていますとだけ言つと立ち上がった。

「すみません、時間が無くなってしまったようです」

「あ、直で来たの？」

「ええ、突撃訪問です」

「ふふ、面白かった？」

「はい、面白いものばかりでした」

はあ、ようやく出て行くようだ。

「すみませんが兄さんとお話させてくれませんか？」

はあ？

驚きと疑問、そして嫌な予感がするため出来れば行きたくないのだが。

ここに来た時点でまぬかれないようだ。

「零、いいか？」

「全然大丈夫。行っておいで。先に部屋に戻っているから」

そっぴい残し行ってしまった。

大丈夫。

俺はこんなやつに負けない。

「順調のようだな」

「……まあな」

「それにしても本物がここまで可愛いとは思わなかった。

さすが根っからのお嬢様なのかそれとも野澤家の教育がいいからなのかは分からないがほかの女より一緒にいて面白い。

ここまでだと本気で欲しいな」

「っ?!」

こいつの言葉に俺はたくさんものを失ってきた。

あの家では第一優先はこいつだからだ。

「別にかまわないよね」

確認でもないただの命令に負けそうになる。

でも俺は・・・・・・・・・・

「もしここで婚約者を変えたならばこっちが損をするような立場になるんじゃないか？」

「は？」

「お前らが何を取引するために俺を婚約者に仕立てたのかは分からないが、もし今お前に変えたとしたら白紙に戻すという事になって不利益が生じないか？」

あっちはこういう取引はうまそうだし」

「まあ今でもぎりぎりの範囲なのにそれ以上させられたら元も子もないしな」

はあ、しのげそうだ。

「じゃあお互いに良好の関係ならば問題ないな」

は？なんだ、その良好な関係って。

「彼女が僕を選ぶは問題ない。」

最近退屈してきたところだし新しいゲームだと思えば無駄な時間だ
と思わないし」

「何言つてあがる」

「ん、分からないの？」

俺は今から彼女を落とすことに決めたよ。

面白そうなゲームになりそうだ」

落とす？

落とすって恋するってことだよな。

漣がこいつを愛すのか？

「じゃあ僕は帰るよ。せいぜい残りの任務を頑張って」

そういいながら俺の前から去っていくあいつ。

このときから俺と漣との婚約期間は長い長いカウントダウンを始めたのだった。

「おかえり」

「ただいま」

漣、お前はどつしたら俺のものになる？

やっぱり俺のことは契約上の婚約者としか見ていないのだろうか？

俺は、俺は。

「どつかしたの？」

「・・・・・・・・・・いや、なんでもない」

俺は漣のことが好きだ。

私と不良の気持ち

おかしい、何かがおかしい。

最近そう思うのだ。

彼の行動が。

「何だろうな」

「どうかしたんですか？」

「あのね悠理」

今現在空き教室にいる。

通称 f i v e 部屋。

歴代、そして現在の f i v e しか入ることが許されない部屋。

実際は何も無いんだけど。

この部屋はいつもは一人になりたいときや話し合いのときにしか使われない。

ただ今日は私もそして悠理も一人になりたかったみたいだ。

私の場合はこのもやもやした悩みが気になるだけで。

そして考えていてもしょうがないのでもやもやの原因の話をした。

「要するに庄ちゃんの弟さんが来てから庄ちゃんの行動がおかしいと」

「うん。なんかよそよそしいというかなんと云うか」

私を見る目が変わったんだ。

なんとというか普通に接してたのにあの後から悲しむような目。

例えば………永遠に別れるわけではないけれど遠くに行ってしまうようなときに見る目。

「それしあの弟が帰ってから戻ってきたとき何か言おうとしてたんだよね。」

最終的に言わなかったけれど」

絶対このことに関係する何かを言おうとしてたと思う。

これなら口に出させるようにしとけばよかった。

今からじゃ多分言わない気がする。

「先輩ってこんなに他人のことで悩むんですね」

悠理、それは失礼に値する言葉よ。

まあ、否定はしないけれど。

だって面倒事嫌って起こさないようにしたり他人のことは気にしないようにしてたもの。

相談されれば乗ったけれど。

「庄ちゃんに聞いたら早いすよねって言いたいところですけど今
回ばかりはそうとも行きませんしね」

「だよね」

庄吾は今まで一緒にいて変なところで意地というかプライドが高い。
しかもそのことに関するといつもは働かない頭がフル回転する。

このタイプはあまり好きではない。

私の場合は周りから徐々に攻めていくため前置きが少し長い。

でも庄吾の場合は悠理みたいになっすぐ来る。しかも臨機応変という最悪な形で。

周りが固まっていないと私の積み上げてきたものが壊れて話し合いに負ける。

どうしよう。

「ただいま」

「おかえり」

桜が咲く前は言っても返ってこなかったのに今返事が返ってくるという何気ないことにちよつと安心を覚えている。

「今日は遅かったな。外でも出かけてたか？」

最近増えた同じような二言目。

なんで私が学校外に行くことを拒んでいるんだろう。

そしてその目。

私はここにいるのに。

どうしてそんな目をするの？

知りたい、知りたい。

庄吾が私に対して思っていること知りたい。

不良と夏祭り（1）

あいつが来て約2ヶ月。

何も無かった。そう、あの植えつけられた芽が本当は無いじゃないかって言っぐらい。

本当に何も無かったかのように時は進んでいた。

外では雁字搦めになるように仕掛けられているとも知らず。

「庄吾、早くして」

「遷、そんなに急いだっていいことねえぞ」

「いいの」

俺たちは今この地域で一番早く開催される夏祭りに来ている。

門限上許されるのは高校生から。

小学生の楽しみは夏祭りの話を聞くだけという悲しいもの。

俺は結構行っただけだな。

だから澪にとっては初めての夏祭りだ。

朝からハイテンションだった澪。

数着あつた浴衣を楽しそうに選んでいたのは微笑ましかった。

『あ、庄吾はこれね』

ポンスと布団の上にほかれた落ち着いた浴衣を見せられたときは驚いたが。

それから夕方になるとまず俺の着付けをしてくれて、それから意気揚々と1時間ほど部屋に籠もり支度をしていた。

その間に悠理たちに『デートですね』と口をそろえてからかわれていた。

それから部屋からようやく出てきた澪に少々見惚れて

『え、もしかして似合わない？』

なんか思い違いの言葉を発してくれて今に至る。

「おいしい」

出来立てのたこ焼きを口に入れ嬉しそうに言葉を発す。

こういうところは俺たちの生活と変わらないような気がする。

あの学校の生活は普通の寮制学校と変わらない。

初等部、中等部は給食のおばちゃんがいるが高等部はほとんど弁当だ。

もちろん自分で作っている。

話によると就職や一人暮らしする子には生活の基盤を作るためと将来自立しなければならぬ生活が来たときに対応するためだそうだ。

この学校って金持ち学校とか言われながら豪華な生活はさせてないんだよな。

代わりに孤児院や貧乏でお金が無いけれど大学へ進学したいと言う受験生たちにお金を使ってる。

澪曰く『徒然草の相模さがみの守時かみ頼の母はだよ！！』

為政者は儉約が大事であると言うことが書いてある段らしい。BY

麻由子解説

お願いだから物語を使うのはやめてくれ。話が通じん。

「庄吾、庄吾」

「へ、あ、悪い。ボーっとしてた」

「人酔いでもした？」

「いや、ほんとにボーっとしてだけ。漣こそどうかしたか？」

「たこ焼き食べるかなあって。奢ってもらったし」

「ああ。じゃあひとつ」

俺がそういうと漣はたこ焼きに刺さっていた爪楊枝をたこ焼きを刺したまま俺に差し出した。

うん、もしかしてこれは『あーん』ですか？

「……え、猫舌？」

いえいえ確かに俺は猫舌だけれどそういう意味ではなくてね。

別にそんなに必死にふーふーしなくても大丈夫ですよ漣さん。

だから別に爪楊枝を渡すだけで………

「庄吾、あーん？」

完全に洩の可愛さに負けてしまった俺は従うのだった。

30秒後実は間接キスしていたことに気づいた俺はそのとき飲んで
いたジュースでむせた事はあいつらに秘密だ。

不良と夏祭り(2)

それから俺らはしばらく屋台を散策した後神社にあるベンチで座っていた。

なんでベンチがあるのかは知らないが健次の話によるといくつかあるこの夏祭りのベストポジションはここらしい。

まだこの土地のことを知っていたらもつといいところを教えてあげられるのに・・・つと残念そうに言っていた健次には感激とこの場所を教えてくれて心から感謝する。

いや今度麻由子絡みで何かあったとき絶対健次、お前の味方をする。
・・・お前が悪くなければ。

「もうすぐ夏休みか」

「ああ。澪は家に帰るのか？」

「部活があるし、そもそもお婆様の家以外は私の居場所なんてないからね」

寂しそうに笑う澪の笑顔を見て昔の俺を重ねた。

俺もあの家以外に居場所は無い。

今は慣れて、というか諦めて思わなくなったが昔の俺は居場所が無いことに寂しくて、自己険悪して、あいつを憎んだ。

漣も俺もそして後から知ったがこの学園全員が同じ。俺の心には少し前の思いは無い。

俺たちは他人の慈愛を受けて育った人間だ。

そしてこの学園にいる人間だからこそなのだろうか。

自立し大人になったとき俺たちは俺たちと同じ苦しみや悲しみを味わっている未来の子供たちに愛情を注ぐのだろう。

その苦しみと悲しみの連鎖を断ち切るためとそのまた子供たちは本当の親の愛情を知って暮らすために。

難しいことを珍しく悟っていた俺はふと現実に戻ってくると暖かいものが触れていることに気づいた。

特に手に。

……もしかするとの展開でしょうか。

「漣？」

「ん？」

俺の呼びかけに顔を向けたせいか俺と漣の顔が近い。

もし俺たちのことを知らない人が見ていたら多分カップルで今は・
・・

「このままキスしちゃう？」

「・・・」

こういう雰囲気だ。

もちろん漣の言葉でぶち壊しだけど。

むしろあなた遊んでません？

「もしかして反応なし？それはそれで傷つくんだけど」

うーん、健次君のアドバイスどおりに従ったんだけどなあと一言。

・・・あいつ何言いあがったんだ。

「漣さん、あなたは何やってんの？」

「何って庄吾を誘惑？」

「なんでそこは疑問系。なんでまた俺を誘惑しようとしたの」

「だって・・・弟君来てから私に対して寂しそうに見てたのがむ

かつくんだもん」

……気づいてたの。

あいつから漑をとられるのが嫌だ。でもその方法が無くて何も出来ない自分をもっと嫌で。

そんなことからいつの間にか俺は漑に対していつかは居なくなってしまう寂しさを向けていることは分かっていた。

でもそれ気づかれないようにしていたのに。

「確かに庄吾よりかっこいいし、紳士的だし、頭良いみたいだし」

「悪かったな」

「でも……」

そつと漑の手が俺の頬に触れた。

「それでも私は庄吾がいい」

頬が熱い。それ以上に心が熱かった。

こんな言葉人生の中で言われただろうか。

あの家以外では皆すべてあいつが良いといった。

あいつの方が優っているから。

でも澪は、目の前にいる少女はすべてを知った上で俺を選んでくれた。

契約上の婚約者としてではなく、一人の霧崎庄吾という人間として。

バーン、バンバン

遠くからは花火の音が聞こえる。

「庄吾？」

嬉しさのあまり俺は涙を流していることさえ気づいていなかった。

そして澪はそれ以上言わずただ俺の涙を拭いた後寄り添いながら花火を見るのだった。

Side Mio

初めてのお祭り。

小さい頃お祭りを遠くから見ただけだった。

お婆様とあの頃はちゃんと私を見てくれたお父様からお祭りのことを聞いていた。

行ってみたかった。

そして今日、願いが叶う！！

朝から私はテンションが高かったと思う。

庄吾に『どんだけ行きたかったんだよ』と苦笑いされてしまった。

だって初めてなんだもん。

それから拒否権を与えないため唐突に行くことを切り出して2人で行くことになった。

実は私が密かに作ったのは内緒。

こういうときお婆様がすごいって思う。

それから夕方になって庄吾を浴衣に着替えさせた後私は普段はあまりしらない凝ったメイクをして外へ出た。

あまり凝ったメイクなんてしないから自信ないんだよね。

悠理に任せればよかったかなあ？

そんな不安を抱えつついざ、出発。

いろんな出店を見て回って楽しかった。

射的は次に行くとき合ったら挑戦したい。

弓は得意だけれど的が近いのか全然出来なかった。

なのに庄吾ったら一発で落としたんだよ。

ちよとむかつく。

花火の時間が近いのかたくさん人が来て込んできた。

よく見てみるとカップルがぞろぞろ。

今庄吾と手をつないでいるけれどはぐれない為。

例えば庄吾よりここに住んでいるのが長いといってもそれは学園内の

話。

外に出れば全然分らない。この先に何かあるとかどこに続いているとか。

ケータイを持っているから連絡できるといっても合流するのは大変だ。

だから少人数で高校生ということはあまり知られていないし知らなくていい情報だ。

でも事情を知らない赤の他人には多分カップルとして見られているのかなあ？

一応婚約者。紙の上での。

約半年で友達になれたと思う。

ちゃんと私として接してくれたと思う。

もし契約が切れたら、そのときは庄吾、あなたは どうする？

私と不良と招待状

晴れたある日だった。

なのに私にとっては、いや私にとっても嫌な予感がする始まりに過ぎなかった。

「・・・また来た」

なんでまた、という感想しか持たない手紙が1通。

そして庄吾にも同じく手紙が1通。

双方に関係するのは・・・本家からの手紙。

なんか嫌な予感がするんだよね。

だいたいこの手紙が来る時点で悪いことしか書かれていないことは分かっているのだけだ。

「遷、大丈夫か？」

手紙を見たま表情を歪ませている私を心配したのか寄ってきた被害者第二号。

「本家から手紙が来たみたい」

それを言つとあまり表情を変えることのない庄吾の顔が歪んだ。

嫌嫌でも開けるしかない道しかない私たちは同時に破った。

「招待状？しかも庄吾の本家」

「俺はホテルに來いつて言つ通達」

ん？なんかおかしいような気がする。

確かに私が庄吾の本家の招待されることはまあ、察しつく。

どうせあの人たちに頼んで欲しいという意図が隠されているのだから。

でも何で庄吾がホテルに行かなければならないの？

「心当たりは？」

「……いや」

考えたそぶりを見せて首を横に振った。

「そう。分からないのならば行くしかないね」

ここで断ったら相手は何するか分からないから、そう続けていった私は気づいてはいなかった。

庄吾がどんな顔をして私を見ていたか。

不良と新しい婚約者

最悪だ。そう言うしかない。

目の前にいる女。 澪とは違う女。

同じ女なのにこう、なんでむかむかするんだろう？

別に澪が化粧をしても綺麗とかそういうような感情しか思わないのにこの女には気持ち悪いとかそういう負の感情しかない。

はあ、どうやって破談にさせるかさっさと計画、実行しないと俺のいらいらが納まらないかもしれない。

「ふうん、こいつがねえ」

お願いだ、品定めするような目を向けなくてくれ。

澪は本質を見抜き価値を決めていた。一応俺自身を見ていることは変わりなかったから何も感じなかったがこいつの場合は違う。見た目だけだ。あとあいつが与えた俺が持っているの利益か。

「まあまあ、3・5点ね。ま、唯一の救いはタイプではないけれど
好みつてことかな」

「・・・」

「何か答えてよ。つまらない男は嫌いなもの」

「俺も気持ち悪い女は嫌いだよ」

「な、あんな今なんて言った！！わ、私に！！！！」

「俺はお前みたいな気持ち悪い女は嫌いなんだよ」

「あんたねえ・・・よくも多美丘グループの社長令嬢に言えるわね
！！」

「知るかよそんなもん。俺には関係ない」

「お父様のお友達の紹介だったからしょうがなく来てやったのにこ
んな仕打ち・・・許さない」

「どうぞどうぞ、潰してください」

確か最近多美丘グループの下請けと本社の不穏なやり取りについて
騒がしくなり始めたらしいから今はつぶすことは出来ないはず。

出来たら早くて1、2年。事によっては5年ぐらいか。

どう転び始めるかは分からないけれど。

多美丘の令嬢さんはずかずかと歩いていつて扉を開けようとしたときふと思い出したように俺の方に振り向いた。

「あんた、野澤澪を知ってるのよね？」

まさかこの変哲も無いただの質問が波乱を起こすとは誰も思っていただろうか？

「ああ、知ってる」

「確かあんたは元婚約者だっけ」

「・・・まあな」

「ここはもう”元”で通っているのか。」

「ふうん・・・」

このときこの女の口角が上がったことに俺は気づかなかった。

そしてあいつと同じように欲しいものは絶対に手に入れるという性格の持ち主と言うことも。

私と不良の弟と

「きれいですね」

「春になれば満開の桜があそこで咲くんですよ」

「それは楽しそうですね」

まあ予想していた通り庄吾の母親と弟君が出てきて一通り世間話をした後『庭を案内するように』と言って弟君に自分の家の豪華さを説明するようにして現在に至る。

そんでもってつまらない。

はあ、堅苦しいの苦手……

・ 庄吾の母親も母親で中身がないと言っかうわべだけと言っか……

この家全体が嫌いな雰囲気で包まれている。

多分庄吾のことを知らないで本当に紙の上の妻になってここにきてもそう思うと思う。

「お楽しみになりましたか」

「ええ、楽しかったわ」

ふふつと作り笑いをすれば何か戦略的な・・・何かを考えているような目で見ていた。

なんかこの弟変なこと考えている。

「そうそう、実はですねあなたにいつておかなければならぬことがあるんですよ」

「なんですか」

「
なつたんですよ。もちろん兄も知
ってますよ」

「えっ？」

「ただいま」

「お帰り」

慣れてしまった存在。これからも隣に居るという前提の存在。

だから拒むことは出来なかった。

お婆様やお爺様が居なくなってしまうたら本当に私の居場所がなくなってしまうことは分かってたから。

嘘でも契約上だろうと誰かが居て欲しいと思っていた。

でもそんな弱音、誰にもいえなくて。隠し通さなければならなくて。

本当は、本当は寂しかったんだ。

お母様が死んで、お父様は現社長として忙しくて、お婆様やお爺様は私が一人になっても生きてけるようにしてくれたけれど私の望んでいたものはくれなかった。

ただ傍に居て欲しかった。

でもそんな私に一筋の光が差した。

霧沢庄吾。

庄吾は私が望んでいたことをしてくれた。受け止めてくれた。

だから排除しようなんて思わなかった。

でも庄吾は違ったみたいだ。

庄吾にとって私は本当にただの紙の上の婚約者だったみたいだ。

「遷、どうかしたか？」

「ううん。今晚、グラタン食べたいんだけど庄吾は？」

「いいな、俺マカロニグラタン好きなんだ」

「分かった、今作るね」

庄吾がそう望むのなら私は・・・・・・・・

不良と私と新しい婚約者（１）

俺の行動も言葉も思いもすべて自己満足だったんだ。

それが漣を傷つけるとも知らず、縮まりつつあった距離に亀裂を入れていたとも知らず。

翌週のことだった。

突然姉妹校の交流生として数ヶ月滞在する人間が来たことを知ったのは。

それは俺には関係の無いことだと思っていた。

だがそれは見当違いで。

「多美丘麗香、よろしくお願いします」

気持ちの悪い作り笑いで自己紹介をする女。俺の現婚約者だ。

なんでここに……………

でも関わろうとしなければ漣が分かるわけが無い。

「それから今、霧崎家とうちの家は親しい仲なので彼の隣でもいいですか？」

「・・・えっ？なら隣と交換してくれる？」

そういうと漑ではない人間が動いてくれたがこれで俺は放課後逃げられないことを知った。

しかもあの女絶対わざとほのめかしあがったな。

だけど漑は気づいてはいないみたいだ。

ただ知り合いのようで俺と違う意味で“なんでこいつが”っという目をしている。

さっきの言葉を深く考えてなくて助かったと思う。

だけど俺はこいつが来たことによって気が抜けなくなった。

こいつも漑のことを知っているということは何かしら仕掛けてくるに違いないから。俺にも、そして関係の無い漑の近くにいる人間も。

「ねえ、食堂ってどう？大きいの？」

「見てみれば」

「どんなメニューがあるの？カロリーどのくらい？」

「知るか」

その後授業が終わるたび俺にくつついてきて気持ちが悪い。

胃がむかむかするというか。

今日の澪が作ったお弁当食べれるか心配だ。

『残さず食べた後のお弁当を見るとなんか作った甲斐があるというか嬉しいんだよね』

本当に嬉しそうに笑いながら話していた澪を見ているから嫌いな物が入っても食べるようになった。

事実澪の作ったお弁当（というか料理全般）はおいしいし作ってもらってるから文句は言えないしな。

でもこれが続くと無理かもしれない……………

「ねえ、多美丘さん。あなたは知っているか知らないかは分からないけれど庄吾君は澪ちゃんの婚約者なの。だからあなたの行為はあまりよくないものだから離れたら？」

周りも賛同するように注意する漑の信者、確か級長の野辺さん。

遠まわしなのか直球なのか分からないのはここ特有なのか。

まあ直球に言い過ぎると困り、遠まわしすぎて分からなかったのも困るからな。

「あら、まだ“元”婚約者が通ってますの？なら面倒だしもう一度自己紹介しますね」

そう言つて立ち上がると挑発するような目で野辺さん一同、いや実際は漑を見て手を胸当てる。

やばい、こいつ自分から……

「昨日をもちまして霧崎庄吾の婚約者は多美丘麗香になりましたの。あなたたちの忠告を向けるのは私ではなくて後ろにいる彼女じゃなくって？」

「えっ？」

その言葉に俺は背筋が凍るとともに周りの一同と同じく漑を見る。

だけど漑は顔色ひとつ変えずに堂々としている。

「漑、本当？あれだけ仲良かったのに」

「うん、まあ、そうみたい」

事実を否定せずただ認める澗の姿を見て心が誰かに握られたみたい
に痛みを感じた。

不良と私と新しい婚約者（2）

離れていく、離れていく。

目の前に居る、手を伸ばせばそこに居るのに。

離れていく、そんな気がしてならない。

「漣、」

「漣ちゃん、こっち来て」

「騒がしいから、早く」

ささつとすり抜けるように行ってしまう漣。

先週までは『ちょっと行っ来る』そう言っ行っ来たのを思いだす。

それもなくなっちゃった。

今、隣に居るのは……

「ねえ、これ分かんないからやって〜」

「自分でやれ」

このうるさい女。

ていうか、ここの系列で何も勉強しないのは落ちる一方でむしろ卒業するのが難しいの目に見えている。

“教える”はいいけど“やってもらう”は命取りの行為だ。

それでもなくてもつけてる香水が臭い。

「漣、これなんだけれど・・・」

「あ、これはね」

一番救われたのは部屋に関しては何も言わなかった。

とつかあいつ俺を使えば漣に勝てるモノがあるんじゃないかと探ってんじゃないか？

俺を使っても何も出てこねえって。

早く分かれよ・・・・・・・・

「庄吾は知ってたの？」

「え？」

「婚約者が変わることに」

少しトーンが下がったような気がしたのは気のせいだろうか？

「いや、俺がホテルに行ったときに知った」

「そっか・・・・・・・・」

今、笑ってる澪の方を見たくない。

隣に居るのに見たくない。

だってもう澪は・・・・・・・・

新しい婚約者と天才（1）

先輩が庄吾先輩との婚約を破棄され変わりに庄吾先輩の弟である和真とかいうやつをなっ たという話を聞いてから次の日のことだった。

「は？」

「なんか交換留学でも何でもいいから迎えてくれって」

「何でまた・・・」

朝早く叔母に呼び出されたと思っ たら厄介な話を聞いた。

しかも今日の話。

私も嫌なんですけど・・・

多美丘麗香

通称厚顔無恥の根っ からのお嬢様。

その上ライバル心というかいつも自分が上に居たがるのか態度は人を見下している。

だから私もそして、小さい頃から交流のある漣先輩も嫌っていた。

まあ、私はお母さんがたとえ金持ちであつても庶民として暮らしてきたわけなのであのお嬢様には嫌われているけど。

先輩の場合はライバル心めらめら立った。

まず容姿も財力も言葉遣いにいたるまでも優っていたから人目も引くし内心は置いというて外面上は人に接するのは物腰を柔らかくして金持ちだからという差別も無い。

当然人がまわりに集まる。

だって同じ“金持ち”と呼ばれるカテゴリーに分類されていても見下してる人間とほかの人間と同等に扱われるのなら後者の方がいいでしょ？

だがこの根っからのお嬢様にはそれが気に食わなかったみたいだ。

それから漣先輩のやってることは何でもまねしていた。

まあファッションだけは違つたけれど。

・・・多分先輩から婚約者を取つたつて言つのを見せ付けたいんだ

よね。

馬鹿だねえ。

恋とか愛って時々すごいって思う時がある。

それで大恋愛をした末に結婚して子供に恵まれた人を知っているからかもしれないけれど。

だからそういう感情を持っている人間は強いと思う。

『恋は盲目』って言うて“好き”っていう感情だけで周りを見ずに突っ走ってしまうのが欠点だが。

あの二人は大丈夫だろうか。

新しい婚約者と天才（2）

多分誰もが見ただけならば何も変わっていないように見えると思う。

しかし、私には分かる。

漣先輩は寂しそうに、庄吾先輩は苦しそうに互いを見ている。

二人共思っていることは同じなのに互いの思いは分からないから言えないまま。

思えばあの出会いは正しかったのだろうか、間違っていたのだろうか。

誰に説いたって誰にも答えは導き出せないだろう。

『事は小説より奇なり』ではないが人の出会いも小説よりも不思議なものであると思う。

お嬢様と一般庶民、いや不良と言った方がいいか、この二人は今までどうりの生活をしていたら出会はずはなかったのだから。

「寂しいのよ」

珍しく弱音を吐いた澁先輩に驚いた。

「どうしてかな？ 庄吾が隣に居ないだけで寂しいの」

「でも一緒に生活していますよね？」

「うん、でも……寂しいの。何でだろう？」

自傷気味に笑う先輩の笑顔はどこか痛々しい。

厚顔無恥のお嬢様が来て数日が経ったことだ。

「先輩は……望まないんですか？」

庄吾先輩が居ることを。弟の方ではなく……」

「そうね、我が俤が通されるなら一緒に居たいわ。」

意外に退屈しなかったかな。庄吾が婚約者になって数ヶ月。

むしろ楽しかったかも。

この数年間色が無かった生活にいきなり入ってきた鮮やかな色に塗りつぶされて」

ふふ・・・っと普段はすることのない思い出し笑いをする澪先輩にすこし頬が綻ぶ。

望むことも期待することも諦めたようにしない澪先輩がいつの間にか望むようになったのだ、自分の本当の気持ちを。

「でも私は人を縛り付けるようなことは出来ない人間だから・・・もし庄吾が私との結婚を望んでいないなら・・・その時は庄吾が望むとおりにする」

「庄吾先輩だってあんな厚顔無恥よりも先輩の方がいいですよ。

現に会う度に愚痴を聞いてあげてるんですからね」

「私は人を愛せないから関係ないのよ。

だから婚約破棄もすぐに出来そうなアレなら別にかまわない。

庄吾が自分から愛せる人と暮らすことが何より大切だから」

仮面を被って笑っている。

でも私が最初に見た完璧な仮面ではない。

だって誰が見ても先輩は、泣いているようにしか見えないのだから。

私と新しい婚約者

あのお嬢様が居座って悠理に初めて自分の……庄吾にも誰にも言えなかった本当の気持ちを言った。

笑えない話だが自分の気持ちを伝えるのは苦手だ。

それは小さい頃からの教育やお母さんたちを心配させないためと思い込んでいた幼い自分が今の自分に影響しているのかもしれない。

でも悠理ならスツと普通に言えた。

多分、本当の私を見抜いた悠理だからこそなのかもしれないのだけ
れど。

「あら、元婚約者さん。こんばんは」

どうしていい気分になっていたのにあなたに会っただけだろうか。

出来れば……帰ってほしいぐらいだ。

どうせろくでもないことを言うに決まってる。

その前にこういうときは、

「こんばんは」

スルーが一番。

「な、なんで言ってるのよ」

「何を？」

「あんたの婚約者が取られたのよ？」

「・・・親の決めたものだから実際は友達だし、私のほうもやめさせようと思えばやめさせられるし。」

そう何か言うようなこともないと思うけど」

「それは・・・そうだけれども。」

「・・・で、でもあんな不屈き者のようなやつをそばに置き続けていたあなたの本心が分からないわ。」

どうせ私と同じように金目当てだったんでしょ。

それが新しく事業を始める資金源の調達か」

「・・・・・・・・本気で言ってる？」

今、心の中でふつつと湧き上がってくるものがある。

庄吾が不届き者？

まさか。見た目は目つきも悪いし柄も悪そうに見えるけれど、ちょっと不器用だけど心遣いも出来る優しい人なのに。

それを……………

「ごめん、物珍しさだったか」

彼女の品の無い笑いが私の甘い考えを苦しめる。

ああ、私の手で一人にさせるべきだったのかと。

本当は自分が甘えてしまつてずるずるとこの関係が続けてしまつて思っていたから何も言わなかったのに。

人を愛せないくせに愛してほしいと願ってしまう私のために彼ををもうこれ以上巻き込ませないために。

「それにしてもつまらない男ね」

「……黙れ」

「え？」

「黙れって言ってるでしょ」

暗い中でも目が冴えてきているのか今彼女の顔が引きつっているのが分かる。

昔から彼女のことは嫌いだったけれど大企業の取引先という名目だけである程度の口の悪さや態度は目を瞑ってきたのに。

彼女はそれを分かっていたいなかったのようだ。

ついでに庄吾には悪いがあのだも潰そうか。

調べて分かったところ彼の目的は私の体と権限だったみたいだから。もちろん昨日あたりに後ろ盾は潰してもらったからあのだは慌てるだろう。

そして明日あたりにけりをつけに行つて来るか。

ああ、どいつもこいつも、

「うるせえんだよ」

不良と大切な人（１）

その日はえらく漑はあわただしく、そして綺麗な格好で行った。

何も言わずただ俺の朝ごはんと昼食の用意をして。

それはいつもしている『おはよう』という会話すらなく。

「はぁ・・・」

なんだか暇だ。

いつもしているゲームやテレビを見ても面白くない。

普段は時間が忘れるぐらいやり続けているのに。

多分、漑がいないせいであるけれども。

・・・どうしてあんなに急いで出て行ったんだろう。いつもより綺麗な格好で。

いや、漑がいつも手を抜いているわけではないが少しメイクの仕方？みたいな、雰囲気って言うものがまったく違った。

誰かに会うみたいだけれど。

その誰かが女であってほしいと思うのは俺のエゴなんだろう。

今はただの友人であるだけなのだから検索する権利なんてどこにも無い。

それを知ったのは昼過ぎだった。

多分、明日の朝刊でどちらかが一面に載せるか新聞社が話し合うような内容。

多美丘グループの次々に表ざたになる不穏な影と霧崎コーポレーションが野澤財閥に吸収合併された。

もちろん野澤財閥の名前になったのは言うまでも無い。

どうしてこうなったのは分からない。

確か独立した共同部門のの傘下の会社を作るという話だったはず。

それこそ合併なんて話は聞いてない。

でも澪が急いで出て行ったのはうなずけるかもしれない。

・ ・ ・ ・ ・俺はまた一人になるのかと心のそこにいる小さな自分が叫んでる。

俺はまだ ・ ・ ・ここに居たいのに。

不良と大切な人（２）

夕方、一日中暇だった俺は今柄には無いことをやっている。

花の水遣り。

事の発端は数時間ぶりに来た澁からのメール。

『花に水やるの忘れたからお願い（ハート）』

俺に恥をさらせと？

そんな気がしてならない文章にやった振りをしようとしたが……
……ハートでつられました。

……簡単に悪かったな。

もちろんおかげで後ろから、

「霧崎先輩が花遣りを……」

と珍しい目で見られている。

別に悪いことしてるわけじゃないし俺が水遣りをしようとはしよう
と勝手だろうが……！

「庄ちゃん意外なことしてるね」

そう無愛想に言ってきたのはこの学校の女バスのエース、いやこの学校に君臨している女王。

「悠理笑うな」

「え〜、漣先輩結構いい趣味してると思いますけれど」

あの趣味をいい趣味というお前らが分からねえよ。

視線を花に戻し水をまく。

たつく、いつもこんな大きな範囲をやってるのかあいつは。

「ハートで釣られて今度は先輩と一緒にいるために花の水遣りの手伝いですか？」

ドキッと心臓が止まりそうになった。

「〜か何でこいつは知ってたんだよ。」

時間が止まったように動かない俺を見て同じようにびっくりしているお姫様。

「え・・・マジ？」

え、まさかの予想でした？

それから後ろからお姫様の笑い声がとめどなく聞こえたのは言っても無い。

もう悠理笑うな！！

不良と大切な人（3）

「で、なんでお前はここにいるんだよ」

一番疑問である言葉を投げかけた。

「可奈ちゃんが教えてくれました。 零先輩の隣にいる人が水遣りをしてるって」

「そう」

この学校の女王悠理は異常なまでの運動神経の持ち主のためか、残酷なほど率直に考えなしに言ってしまう性格のせいか

俺は後方のせいだと思うが
人に好かれることがない。

実際9年ほど在住しているくせに親友と呼べる友はあまりいないという話を聞いた。

しかも彼女と同じように“異能”と言われる存在の人間。

その中でダイヤの原石と呼ばれるほど未発達な天才の一人が彼女の後輩である灯聖可奈。

俺は初対面で彼女に嫌われたみたいで、内心名前を呼ばれないほど嫌われているらしい。

「そんなことより、漣先輩どうしたんですか？」

「それがどこにいったのかわかんねえんだよ」

「え？」

「瞬間トーンが低くなったのは気のせいだろうか？」

「朝、慌しく出てったんだ」

「まさか……」

「どうした」

悠理の顔色が悪くなっていくのが見える。

もしかして俺はとんでもないことをしてしまったかもしれない。

俺は知らなかった真実をして走り出した。

まさか俺が知らないところでこんなことになっているなんて。

漣がそんなことに巻き込まれそうになっているなんて知らなかった。

『芽を摘みにいったんだと思います』

なにを？

『澪先輩に対する凶器にもなりうる芽を』

芽？

『あの弟……澪先輩を襲わせようと、していたみたい、なんです』

え………

『もちろん、大きな芽はとりましたが小さな芽は取り除き切れていないので元凶そのものを取りに行っただんだと思います』

不良と大切な人（４）

走って、走って、行き着いたのは校門。

でもその前には車が止まっていた。

降りてきたのは・・・・・・・・零。

大丈夫なのか。

怖い思いをしてないか。

いろんな思いがうずいているのにうまく言葉が出ない。

声に出せ。

思っているものすべてを。

そして、零に対する謝罪を。

でも俺は動けなかった。

だって、たとえば俺が関わっていないとしても一般的に見れば同罪。

だってそういう計画は知っていなかったとしても恋愛をゲームとして澪を遊ぼうとしていたことは知っていたのだから。

あの時意地でも止めておけばよかった。

かつこ悪くても、馬鹿にされても、止めておけばよかったんだ。

俺は………澪を売ってしまったことには変わらないのだから。

「庄吾、どうしたの？」

突っ立っている俺に気づいた澪は無邪気な目をして俺を見ている。

「澪……」

「あ、ニュース見たのね。大丈夫。その話は後でするけれど別に庄吾が出て行くとかそういう事は無いから。

お金のことも心配しないで。

時間はかかるけれど対策は練ってあるから」

俺が会社がなくなったことを気にしているかと思っているのかそう話をする。

そうじゃない。

俺にとって会社なんてどうでもいい。

家族のことは気になるけれどこの約半年澪を見てきたから悪いようにはしていないと思う。

今俺が気になっているのは……

「どうしたの？ 庄吾」

目の前にいる元婚約者で、俺の一番愛しい人。

「ごめん」

「え？」

「ごめん」

グイッと俺の方へ引っ張った。

すっぱりと抱きしめやすい大きさの澪。

近づいてこんなにも小さかったのかと実感する。

ごめん、怖い思いさせて。

ごめん、守れなくて。

ごめん、こんな臆病者の俺で。

ごめん、こんな小さな体で大きな傷を背負わせてしまって。

私と大切な人（１）

『俺の・・・兄貴のこと好きですか？』

腹を割って話したら出てきた元婚約者の本心の言葉。

私は人を愛せないから。

私は人の愛し方を知らないから。

私は彼を幸せにすることも方法も知らないから。

だから私は彼を“解放”しないとイケないのだ。

でも・・・

「ごめん」

そう言って私を抱きしめる彼を見て決心が揺らぎそうになる。

大丈夫、気にしていないから。

大丈夫、何も無かったんだから。

大丈夫、あなたは悪くないよ。

言いたい。

抱きしめたい。

“好き”って言いたい。

でも私には……

「あの……庄吾」

「なんだ」

「みんなの目の前で抱きしめられるのは……ちょっと恥ずかしいんだけど」

事実を突きつけるとわれに返ったように周りを見渡す彼。

触ってきたときいつもより体温が高かったから多分走ってきたのだろう。

それがこの騒ぎを呼んだんだと思う。

「わ、悪い」

状況を把握したのか彼は慌てて私から離れる。

顔を真っ赤にしている彼がちょっと可愛く見えた。

男に“可愛い”は禁句ですからね、そう健二君にアドバイスを貰ったがやっぱり可愛いものは可愛い。

そしてちょっと嫉妬してる。

「庄吾、部屋にいこうか」

だってこれを見てるのは私だけじゃないんだもの。

ガツチャンつと鍵を掛かった音が聞こえるとああ、これで終わるんだなあって体温が下がっていくのを感じる。

なんか別れを切り出すような気分だ。

いや、実際に切り出すんだけど、それは普通の別れではなくてただの位置づけが変わるだけで友人としてなら何年も付き合うことができる。

紙の上では婚約者であつても現実の関係がそうだったのだから生活にはさほど変わりはないのだろう。

私の庄吾に対する気持ち以外は。

私と大切な人（2）

彼が喧嘩、というか一方的に私が怒って数時間した後この部屋に戻ってきた時のことを思い出す。

血相変えて私の無用心さを叱ったけ。

私はその言葉がとっても嬉しかった。

この学校に盗みを働くようなやつはいないことも私を襲おうとするやつもないことも知っている。

でも、ほとんど知らない相手に対して怒るような人なんていないから。

ああ、私のこと本気で心配してくれる人だ。

そう思ったのだった。

それが彼のことをよく知りたと思った理由であり一緒にいることを許したときだった。

「多分テレビで見たと思うけれどご存知の通り霧崎コーポレーションは吸収合併して私の会社の傘下に入ったの。」

もちろん庄吾のお父さんも、さすがにトップクラスは無理だけれど、できるだけいい役職に入れるように交渉したから。

ただ……」

「ただ？」

「私の口から言っているのか悪いのか判断しづらいのだけれど、多分庄吾のご両親離婚するかもしれないかな。私のせいで。ごめん」

「いや、そんなの俺ら知ってたし澪が謝ることじゃないよ。もともとこうなることぐらいとうの昔から分かっていたことだから。」

むしろ親父の働き口をくれただけでもありがたいよ。

あの人も実家は金持ちだから心配する必要もねえし。

あ、親権はくすねるな。俺は親父に押し付けてあいつだけほしいとか」

ねえ、庄吾？今自分がどんな顔してるか知ってる？

悲しそうな、やりきれないような、そんな目をしてるんだよ。

まるで、いつぞやの私みたい。

夕日を浴びる彼の顔は未来を諦めている顔だ。

私は彼に未来を諦めて欲しくないと思う。

だって私を一番に考えてくれた他人は庄吾、あなたが初めてなんだよ。

私だってあなたのこと一番に考えているから。

「ねえ、ある人と養子縁組しない？」

「・・・は？」

「和真君は了承してくれたんだけど、古い親戚にね子供がほしいっていう人がいるんだ。正確には後継者だけね。」

それで、もしあの親たちの元に居なくなったらその人と養子縁組しない？

もちろんこっちもバックアップ体制できてるし、あの親たちとも交渉してあるから。

あとは庄吾の意思だけ。

もちろん、した後は後継者になれって言うわけじゃなくて庄吾が自分の進みたい方向に進んでいいよ。

和真君は継ぐ気満々だから気にせず勉強できると思うし。

どう？考えてくれない？」

「え・・・いきなりそういわれても」

うん、そうだよね。

私のやろつとしていることはかなり賛否両論のある話。

いや、三分の二が否に回りそうなことだ。

でもあの墮落した親たちの元にいるのは二人とももつたいない人材なの。

それを生かすためにはこれが一番の方法だった。

そして私の元から離れさせることの出来る唯一の切り札。

『好きよ。愛してるわ』

『ならこんなことやるなよ。もっと別の方法が、』

『いいのよ。例外は認めることは出来ない。たとえ、当主であつても』

私の好きな花、椿が咲く時期がもうすぐ近づいてこようとしていた。

綺麗なのに散り方は残酷な椿の花。

不良と新しい人たちと

「私はあなたの母親なのよ。豊だっているし……」

それなのに私を出て行かせるの？」

本当はこんな小娘に頭を下げたくは無いが今は一大事だからしょうがない。

もしこの小娘の支持を得ないとこの先が無い。

そんな表情が見て取れる。

私はいつもなら貼り付けた笑みで言葉をつなぐのだが今日はもうその必要は無いから素を出したままで行く。

これが私の最初で最後のこの人に対する復讐だ。

「豊は私たちのほうで引き取らせていただきます。

もちろん、何不自由なく育てさせていただきます。

ご心配なく。

それから……あなたは私のことを娘と違ってないくせにこんな

ときに限って母親ずらしようとしないでください。

もちろん有印私文書偽造として被害届けもだしますし、その損害賠償も覚悟してくださいね」

彼女はまさかこうなってるとは思っていなかったのだろう。

厚化粧でも青ざめているのが分かる。

まあ、この人のおかげで3年かかると思っていた計画が一気に動き出したのだが。

それでも野澤財閥の損失のことを考えたら償ってもらわなければならない。

「相変わらず・・・俺は豊のおもちゃなんだな」

溲の古い親戚であるある人との対面とお礼等々を言うため久しぶりにやってきたと思ったら豊に遊ばれています。

「当たり前じゃない。豊、あれ以来から庄吾のこと気になってるんだから」

「豊君も上に立つものはそうやって動かすんですよ。」

よかったね、兄さん。豊君の下僕第一号だよ」

「二人して何のんきなこと言ってたよ。

って、和真、俺のこと……。」

「豊アタ~~~~ック」

あっけに取られていたら豊の蹴りが命中。

イッテ~~~~

「参ったか、怪獣」

「俺は怪獣じゃねえ!!」

「豊ガンバレ~~~~」

「怪獣じゃなくて珍獣でしょうかね」

怪獣ごつこという名の一方的な攻撃を受ける俺を尻目に和やかに過
ごす2人を見て俺は思っただった。

類は友を呼ぶというのはこういうことかと……。

なぜ俺の周りにはこんなやつしかいないんだ。

不良と私と決断（1）

しばらくして俺たちは豊を部屋において別の部屋へと移った。

そして待っていたのは40代後半の夫婦がいた。

とっても顔立ちが綺麗で優雅という言葉が似合うそんな夫婦。

「お久しぶりです、恵美子小母様、隆吾小父様」

「お久しぶりね、澪ちゃん。ますますお母様に似ていらしゃって嬉しいわ。」

小母さん、あんな不屈き者に似ているところが見えなくて喜んでい
るわ」

「そうだな。あの恥さらしに似なくてよかったよかった」

「・・・話が見えないんだけど。」

まったく何を指しているのか分からない俺と和真はいつの間にか座
ってしまつた澪のせいで座るタイミングを逃してしまつた。

というか・・・この夫婦どつかで見たことあるかも。

「すみませんね、こんな不届き者で」

この場にいる人ではない男の声が聞こえた。

振り返ってみるととても若い男性。

そして、雰囲気が……

「お父さんお久しぶり」

漑に似ている。

「ただいま、漑」

「はじめまして、というべきかな。

元当主である栄治です。

君たちには……特に庄吾くんかな？君には一番迷惑をかけてしまった」

「いえ、とんでもないです。

この事態も何年前から予測できていたことですからむしろ感謝したいぐらいです。

もし野澤家の人たちが介入してくれなかったらもつと酷い事態を招いていたと思います」

「それからもしあの親元にいたら俺たちも腐っていたと思います。

それを救っていただいた上、しかもこんな待遇まで用意していただきありがとうございます」

二人そろって現当主で澪の父親やその周りの人たちに頭を下げる。

いつだってそうだ。

この人たちに助けられて過ごしている。

いつか、いや絶対恩返しをする。

たぶんこの思いは隣にいるやつも同じ。

「ずいぶん根のいい子達をいただきましたね。

ちよつといたたまれない気持ちだわ」

「それにしても庄吾君は澪ちゃんの表面上は婚約者だったんだろう？

その辺の情は言いのかい？

といってもこれは最後の確認に近いけれど」

最後の確認？

どういうことだ？

「はい、たとえ情があつたとしても気持ちには変わりません。

当主であつても例外は許されていないのはご存知のはずですが」

「そう・・・」

澪のその言葉の決意に鳥肌が立った。

寒いのだ。恐怖という寒さが襲っている。

嫌な予感がする。

「すみません、どういうことか説明していただけますか？」

冷たく凍って動けない俺に代わって聞いた和真。

その言葉に澪の表情が一瞬崩れたのはなぜだろう？

「なんだ説明しておらんかったのか。

血縁は日本の法律上は三等親までと決められておるがこの家だけは
7等親までと代々決まっておるんだ。

もちろん当主だからとか養子だからとかの例外もなし。

ちょうど私たちの家系は6等親。

ここで養子縁組をすると婚約は不可になってしまうんだ。

それで今この場が最後の確認って言うわけだ」

目の前が真っ暗になった。

俺は二つに一つの選択を迫られていた。

愛を取るか、将来を取るか。

不良と私と決断（2）

「ま、友人ならこういう話は関係ないか」

ポーカーフェイスの顔のおかげか俺の動揺は2人には気づいていなかった。

隣にいるやつは・・・多分何年も疎遠な暮らしをしても血のつながっているからだろう、俺の気持ちにいち早く気づいている。

漑がそういうことを言うことは、俺には何にも感情が無いってことだろう。

でも俺は好きなんだ。

漑を愛している。

だから嫌なんだ。

こんなことで漑を諦めることを、何もせずただ見ているだけは。

「・・・俺は、お断りさせていただきます」

「「え？」」

「ちょ、庄吾？」

「このお話、俺はお断りさせていただきます。

もちろん教育費もろもろ借りている分は一生かけてお返ししたいと思います。

ですがこのお話を受けますと俺に損益が発生することに気づきました。

ありがたい話ですが、俺は・・・」

「庄吾、何言ってるの？もしこのままだったら・・・」

「ああ、親父だったら俺の名で借金しそうだけど、でもいいんだ。

これよりかはまし」

何もしないまままで終わるより何かして終わった方がいい。

このまま甘んじて生活なんて無理だから。

「ごっほん、その損益とは何かね？」

「え？」

「君の言葉を言い換えるとその損益を出さなければいいんだよね？」

だからその損益を言いたまえ」

まさかそついう風に来るとは思わなかった・・・

その損益がまさか涔への告白というをこの場で言えるわけではなくただ動揺しているだけだった。

不良と告白（１）

動揺して何も言えない俺にホローなのか話を変えるためなのか和真の口が開いたとき、大きな、泣き声が外から聞こえた。

「呼んでおりますわね」

「父親であるあなたが行くべくなんだろうけれど意味がないものね。ちようどいいし、ここで休憩にしましょうか。」

もうすぐお昼の支度が出来ますしね」

もうそんな時間なのか。

時間を見ると２時間ほど経っている。

・・・どうりで豊が騒ぐわけだ。

昼が過ぎ夕方。

話し合いの再開もしたいが当事者である漣の小父さん夫婦が帰ってしまったので今日はこれで解散となった。

ん、で今俺は・・・

「庄吾？何言っちゃってくてんの？」

外の風よりも冷たい空気に曝されております。

怖え・・・

久しぶりに本気で怒るところ見た。

というか素がもろ出てますよ遷さん。

「いや、さっき言ったとおりにですね・・・」

「なあにそれ？今からさっさと終わらせてくれる？」

庄吾がしないんだったら意地でも終わらせてやるからね」

やめてください。俺のやることです。

というかどうして怒ってんだよ。

俺怒るようなことは何もしてないよ！！

扉がスツと開いたと思ったら和真が出てきた。

あれ？お前帰ったんじゃないかったんだっけ？

溼の顔色を見て何が分かったのか俺の方に視線を向けた。

「俺たちは今保護されている状態なんですよ」

「え？」

保護されてる？

「考えてみてよ。」

あのヒステリックの母親と墮落した男がここに乗り込んでこない時点でおかしいと思いませんか？」

「まあ、俺のことはいいとして母親だったら意地でもお前を取り戻そうとするし、父親だって会社を経営できた頭もあるんだから俺を引き取って稼がせるっていうてもかんがる事ができるけれど・・・」

「この人が無理やりにも誓約書を書かせたんですよ。」

あんたたちの生活が安定するまで俺らを預かるって、ね。

だから俺たちは親権はあの母親たちにあるものの干渉できないという状態にある。

しかもあの母親は弁護士立てて誓約書を無効にするつもりみたいだし。

だから一刻も早く養子縁組しないと取り消されてしまうわけ」

「それで・・・」

それで遷怒ってたのか……

「言わなくていいことをぺらぺらしゃべるお口ね」

「言わなきゃいけないことを言わないのはそっちでしょうが。」

どうして変わりに俺が言わなきゃいけないんだ」

俺だって言いたくねえよ、そう言っただけでまた出て行った。

最近のあいつの行動が見えなくなってきたのは俺だけだろうか？

「ま、そういうわけだから、早めにしてね。」

相手が父親だったらまだいいんだけど母親だから親権に関しては強いよ。

この虚構の鉄壁が崩れるのも時間の問題なの」

そうなら守れないじゃない。

ぼそっと聞こえた遷の本音に胸が熱くなる。

ああ、どんなことがあっても傷つけようとしないうようにするところは遷なんだなあっと感じてしまう。

俺はそういう澪が、

「好きだ」

・・・俺、声出してなかったか？

うん、ぽつんと言ったね、好きと。

それって・・・ヤバくね？

恐る恐る澪の顔を見るとポカーンとしてる。

「は？」

今、俺はとんでもないことをしてしまったようです。

不良と告白(2)

ポカーンとびっくりして固まっている遷。

俺もまだ状況が飲み込めない。

俺は今さっき告白をしました。

ええ、『好き』言いましたよ。

それっていわゆる・・・失恋を自分からしたもんじゃないか!!

ええい!!

そのまま押し通せ!!

「庄吾、そんなに私心配させるようなことした？」

・・・あれ。なんか俺とは違う方向に行っています。

「ここ最近かまって無かったから心配になったの？」

大丈夫、嫌いになって避けてたとかじゃないからね。

ちょっと忙しかったから。

これがひと段落したら要ちゃんたちといっしょにどこか行こうね」

「あ、ああ」

それって勘違いプラススルーパターンですか。

俺の告白は無効ですか？！

なぜか楽しそうに話す漣を見てがっくりする。

分かっているもへこむぜ、これ。

ふすまに手をかけて何を思い出したのか、いや、漣の雰囲気からそうではないと語っている。

そして視線は俺の方に向けられた。

「それから、悠理にも指摘されたんだけどね……私は人を愛しているようで愛してないって。

私もそう思う。

私は人を平等に扱うことしか出来ない。

扱う方法しか知らないの。

「ごめんね、私が人を愛せなくて」

笑って出て行った零の残像が頭から離れない。

笑っていた。

笑っていたけれど・・・泣いていた。

泣いていたんだ。

いつもは泣かない零が。

俺はその場から何かに取り付かれたんじゃないかというぐらいずっと固まっていた。

失恋したからとかではなく何かぽっかりと穴が開いたみたいで。

不良と元当主

それから洩という事が居づらくて洩を避けていた。

もちろんその様子に気づいている人がちらほらと感じたが何も言われなかった。

洩も、多分避けている理由を知っているから悲しそうな顔をしても見つめ振りをされた。

それが今の俺には心地よかった。

「はああああ」

以前洩の祖父である源次郎さんに俺がスパイになれと言われた場所にいる。

やっぱりここが一番落ち着くのだ。

今の俺の気持ちに似ていて。

ギーギー

誰かが近づいてくる音が聞こえて顔を上げると、

「おや、君は……」

「へえ。君もここが好きなの。」

凜香もここが好きでね、お気に入りの場所だったから久しぶりにここに来たんだ」

にこりと笑う栄治さん。

凜香……さんは湊の母親だろう。

そういえば湊のことあまり知らないことに気づいた。

湊のお母さんが死んだということは聞いているけれどどんな人かとかは知らない。

ただ湊が小さいときから忙しく働いていたみたいだし。

「懐かしいな。凜香もねえ逃げるのは早かったしね」

えっと、何が早かったんですか？

「君、湊のこと好きですよね」

・・・すみません、疑問に聞こえないんですけど。

ついでに後ろにある黒いものをしまっただけだと嬉しいのですが。

このとき澪は母親にだと思っていたが性格は父親にだと確信した。

この父親怒らせないようにしておこう。

「振られたのか」

「はい」

親の気持ちとして分かるけれど俺の前で意気揚々と嬉しそうにしないでください。

俺だって凹みますから。

「なんだかねえ・・・やっぱり凜香の血を受け継いでんだねえ」

遠い目をしながら思い出すように言う栄治さん。

そこには悲しみも入っているような気がするのは気のせいだろうか？

「凜香にね付き合う前に言われた言葉そっくり。

凜香の中の定義は“愛されている家庭に育てられた人間が愛し、愛される価値がある”だったんだよ。

まあそれを直してくれた人たちのおかげで結婚できたんだろうけど、ただ最初っから人は愛し方を知っているわけじゃないことに気がついてほしいね。

君は凜の愛し方を知っているか？」

「いえ、まず人の愛し方さえ知りません」

俺だって凜香さんの定義だったら愛される価値も愛す価値も無い。

でも俺は凜に愛したいと思うし愛されたいとも思う。

それはいけないことだろうか、いや違うと思う。

そういう気持ちは誰でも持っているものだし、まず価値ってなんだ？

そう思ってしまう。

そうしたいならば俺はそうするといいと思う。

ただそれが行き過ぎると問題にはなるが。

「だろう？人はさ、初めて好きだと感じた人と一緒にいることで愛し方を暗中模索してくんだよ」

「そうですね」

なんとなくだけれど光が見えてきた気がする。

もう一回、もう一回漣の言った言葉を撤回させ漣が本当は俺のこと
どう思っているか聞こう。

それでも見込みが無かったら諦める。

でも可能性があるならば・・・突っ走ってやる。

不良と元当主（後書き）

もうすぐ本編が終わります!!!
やった!!!

さて、庄吾は濤の壁を突破できるのでしょうか？

私と元当主（１）

『好きだ』

そう言われたとき純粹に嬉しかった。

彼以外に言われたら裏にいろいろな思惑があると思ってしまつのに
そう思わなかった。

多分彼を知っているから。

彼を好きになつてしまったから。

でも、私は……

「豊、どうしたの？」

「だって……」

珍しく甘えてこないこの子が引つ付くように離れない。

「庄吾、悲しそう」

「え？」

「庄吾、悲しそうな顔してた。漣お姉ちゃん、庄吾にいい子いい子して」

多分私が振って気まずいを感じ取ったんだと思う。

つくづく馬鹿だなあっと考えさせられるが自分の決めたことを曲げる気は無い。

まずは彼らを安全で信頼置けるところに移さなければならぬ。

ただ、彼と大きな溝が出来たことは大きな私にとってもその周りにとっても損害だったことが分かる。

次ここへ来るまでに、前と同じように、とはいかなくても友人として笑っていられるようにしたい。

「豊がいい子にしたら庄吾悲しまない？」

「え・・・と庄吾には私がいい子いい子するから今日はもう遅いし寝ようか」

「う、ん。漣お姉ちゃん絶対だよ？庄吾にちゃんとしてね」

「うん、約束」

そう言って指きりげんまんすると豊はバタバタと布団に入ってしまった。

多分、察しのいい子だから今ここで退出しても気にしないだろう。

だけど……この指きりは守れないかもしれない。

元々こうなった原因が私だから。

とことごと音を立てないように部屋に戻る。

明日、朝一で庄吾に話し合いしよう。

私もこのままじゃいけないしね。

「零」

だけどその前に珍しい人が私の前にやってきた。

一応珍しいという言葉を使うことは無いはずなのだが。

私と元当主（２）

昔から父はほか、というか一部の親戚から嫌われていた。

みんな穏やかで信じ込みやすくそして心が綺麗な人たちの集まりであるこの一族が嫌う人。

どんな事情であれ傷ついた人たち、罪もないのに傷つけられる人たち、そして同じ人間なのに経歴などで差別される人たちを無条件で受け入れるのに受け入れない人物。

なぜ嫌われていたのかは小さい頃は分からなかったが今は分かるような気がした。

当時の父は最初に欲しかったものは母ではなく母の後ろにあるもの。

親戚の中でもブレーンである私たち直系を欲しがった。

それを知っていた人たちはみな嫌がる。

だってそれは“私たち”を見ていないことにつながるのだから。

「大きくなりましたね」

「人間、成長期には大きくなります」

「庄吾君も大きかったですね。隣に座ってしゃべっていましたが僕よりも少し大きいですね。」

ちらつと見えたのですが背中と腕に傷がありました。そうとう古い。運動していたのでしょうかね？」

「まさか、庄吾のこと調べたの?!」

「ま、一応ね?」

娘だから、というのはただの名目に過ぎない。絶対に。

彼は私を娘としてみていない。道具だ。しかも私たちと考えるような道具ではない。

私たちは自分たちを道具にすることを許してもほかの人間を道具にすることは許されない。

だから政略結婚という名目で結婚しても私たちは相手側を幸せにする義務がある。

たとえ望まない結婚だったとしても。

そのため私たち一族の政略結婚はほぼ禁止だ。政略結婚は非常時のみ。

だから直系の私の結婚はこの歳に見合いなんておかしいと感じたけれども候補を外されたからその償いも入っていると思っていた。

・・・まさかあの女がここまでぐるだとは思わなかったが。

「あまり頑なにここに仕えないでくださいね。このままだとあなたは壊れますよ」

「あなたには関係ないことです」

「凜香にそっくりで困りますね」

「褒め言葉として受け取っておきます」

「好きな人と結婚することを望んでいます。これは父親としての願いでありあなたの周りにいる人間がそう思っています。」

素直になりなさい。

自分の幸せを望みなさい」

「・・・これが私の幸せです」

そう、これが私の幸せなのだ。

私の幸せはこの一族の幸せ。

一族の幸せはこの会社が繁栄すること。

だから・・・庄吾を巻き込むわけには行かないのだ。

庄吾には庄吾の幸せがあるのだから。

「・・・相変わらず変なところが頑固ですね。

庄吾君、あなたの決めた道は茨の道ですよ。

行き着く先はお姫様が眠る城か魔獣が住む森か。

あなたの努力しだいですよ」

私ともう一人のワタシ

ギュッと体を抱きしめる。

一人なんだと分かっている一人は寂しいと感じてしまうから。

誰も見てくれないことはこの世で一番寂しいことって、分かっているから。

なんとなく私たちは重なるんだ。

それは長く続く血縁のせいなのか。

はたまた偶然重なったのか。

どちらにしろ私たちは似たもの同士。

もう一人の、ワタシとも言える存在なのだ。

「あら、私より早く当主になっておいてそんな顔してたら私が奪っちゃうわよ」

「ハルちゃんが言う現実になりそうだから冗談でもやめてよ」

現実になんかならないわよ、言い方があまり気に入らなかったの眉がよっている。

私より少し長い黒髪にきつい印象を与えそうな一重、でもそれを調和するように整った顔。そして絶対に忘れられないほど有無を言わせないような雰囲気。

私たちのもうひとつの直系、ヤマトウ株式会社の次期後継者山内遥。私にとっては境遇が同じようなお姉さんの存在だ。

ついでに私の友達の先輩でもある。

「オメデトウ、と言いに来たんだけど面白そうなことになっていくわね」

「人の厄介ごとを面白そうと言って首を突っ込まないでくださいね」

「他人事だから面白みが出るのよ」

一言だけ追加するなら私よりも性が悪いというところか。

これでも丸く収まっている方なただけね・・・

「で、庄吾君だっけ？噂の彼。いいの？手放して」

「決めたことですから」

「本人は却下でしょ？しかも告白したみたいね」

パチンと綺麗なウインクする彼女。どこから情報が漏れた。

「気にしないで。ちょっとしたおじ様からのお話よ」

あいつか!!

「まあ、情報源はいいとして」

「いや、私にとってはよくないんですが」

「で？あんたは恋を捨て勉学に励むの？」

「当たり前です」

「つまらないわね」

「そっちですよ？私に言う筋合いは無いと思いますが」

「うらやましいぐらいだわ。零の状況が」

「え？」

「この恋の妨げは金持ちというカテゴリーがあるせいとか私のアピールが足りないせいとか単に彼が鈍感なのかって思ってた。

でも最近はずちの会社の方も妨げになってる。

もうすぐ、あと多く見積もって3年。3年の間に業績を上げないとうちの会社は・・・潰れる。

そのぐらい傾いてるの。あの金融ショックのせいで」

「それじゃあ・・・」

「一応超特待制度でお金は何とかしてるけれど大学を下手したら中退の危機もあるの。」

借金した、しかも膨大の桁の、元お嬢様なんて一緒に居たく無いでしょ？

彼に見苦しい姿なんて見せる気も無いけど。

だからうつらやましいわ。

同じ状況にいられるあなたが」

珍しく弱気になっている彼女を見たのは3度目だ。

1度目は彼女の育ての親がなくなったとき。

2度目は大切なパートナーであり私の友達がなくなったとき。

それほど彼を大切に思っているのだろう。

私が庄吾を思うように、彼女もその彼を思っている。

もし逆転した立場だったら・・・まっすぐ駆けるだろう、彼の元に。

私は・・・私はどうしたい？

立場上決める権利があるのは自分の位置を決められる庄吾と最終決定を下す私。

私は・・・

私と不良ともう一人のワタシ

「今なんていいました？」

「その意気地なしに会いに行くから紹介しなさい」

あの・・・根本的なところを聞いても良いでしょうか？

あなた、本当は何しに来たの？

私と似た性格だから分かる。

完全にこの状況を楽しんでいる。そして、口角を上げながら何かをたくらんでいる。

多分害は無いことだと思う。

そんな人じゃないから。

でも・・・

「これ？噂の意気地なし」

「誰ですか？彼女は」

「彼は庄吾、意気地なしの弟の和真君。こちらは私の遠縁にあたるヤマトウ株式会社の山内遥さん」

「ヤマトウ・・・確かもうひとつの直系って言われている？」

「あら？意外に物知りなのね。」

調べれば分かることなんだけれど今ではほとんどの人間が忘れ去れている事実なのに」

「敵も味方も調べるのは初歩中の初歩でしょう？」

「そうね。もしかしたら私たちが合うのかもしれないわね。」

もし何かあつたら電話でもどうぞ。力になるわ」

「ありがとうございます」

なんか気づいたら手を組んでるし。

おーいあと3年で潰れるって公言してたのは誰ですか？

「で、あなた方が探している意気地なしは今豊にこき使われているですよ」

「親切にどうもありがとう。よし、行くわよ」

「もう、彼に用なんか無いのに会いに行こうとしないでください」

「楽しそうだからよ」

彼女はドンドン進んでしまう。

出来れば今物凄い気まづくなるんだけれど・・・

「お前か、意気地なし」

「は？」

「ハル！！」

いきなり現れたのは澪の格好によく似た人。

この人も澪の親戚の人だろうか？

出来れば違って欲しいんだが・・・この失礼な人。

「ハル、お久しぶり。元気？」

どうして早く来てくれなかったの？」

「ごめん、豊。ちょっと急だったから休みが取れなかったのよ。

でこいつが例の意気地なし？」

意外に普通ね。もっとひよろひよろしてそうだと思ってたのに」

「もう、失礼なことばかり言わないでください。」

庄吾、この人は遠縁の遙さん。多分私たちに一番近い歳の人だよ。

気にしないでね、この人が失礼なことを連発するのはいつものことだから」

「聞いてて失礼連発はそっちじゃないの？」

実際は遠縁じゃなくてももうひとつの直系。

分かりやすく言えばもう一人の当主なのに」

「まだ当主じゃないでしょう？」

「もうなったもんだわ」

勝ち誇ったような顔で言われても効果はありません。

確かに事実、なったようなもんだけれど。

でもまだ正式じゃない。

次期当主どまりだ。

「えっと、霧崎庄吾です」

「紹介されたとおり山内遥。あんた顔を貸しなさい」

「え？」

「言いたいことがあるの。ついてきて。」

あ、澪は来ちゃだめよ。

話があるのは彼だけだから」

「えっと・・・」

「ごめん、話聞いてきてあげて。」

あの人こうなった以上誰にも止められないから」

「あ、ああ」

そう言っただけの彼女の後ろについてく彼。

その姿に少し心が痛んだのは、やっぱり好きだからかもしれない。

「澪おねえちゃん、痛いところあるの？」

「うっん、ないよ。どうしたの？」

「何かつらそう」

多分母親のつらい顔を目にしていたからだろう、私の表情を分かっ
てしまったみたいだ。

「庄吾がね澪おねえちゃん守るって言ってた。」

だから大丈夫だよ。庄吾が守ってくれるよ」

「庄吾が・・・」

「うん。だって約束してくれたんだもん。」

だから僕ね、いっぱいいっぱい頑張って大きくなるの」

誰かと共に歩むことを拒絶していたのは事実。

父のような人をもしかしたら入り込ませてしまいかもしれないから。

でもようやく母が父との結婚を決めた理由が少し分かった気がする。

共に人生を歩みたかったのだろう。

好きだから、好きになってしまったから。

この人の傍にいたいと切に願ってしまったから。

「そうだね」

私も駆けてみようか。

一人の人間として共に歩みたいと、一緒にいたいと願ってみようか。

それがたとえ困難な道だったとしても、今なら越えてゆけそうな気がするから。

不良ともう一人のワタシ

「あの、どこまで行くんですか？」

「あの子のお気に入り場所」

ドンドンの家なのに自分の家のように進んでいくもう一人の当主についていくと小さな一角が見えてきた。

それは唯一廊下につながない離れに隠れていた場所。

一面の花壇。

「すっげー、花」

「そして、零の母親が一番好んだ場所」

「え？」

「ここ、当主以外は入れない場なのよ」

「なら俺、ここに」

「当主と一緒に入れば問題ないのよ。ここで桐恵さんにプロポーズしたりとか、凜香さんがおじ様に追求したりとか」

「いろいろなことに使われているんですね」

綺麗な場所に似合わずドロドロとしている・・・

「そうね。さて、さっさと本題に入りましょうか。」

私、だらだらするの嫌いなもの

そうだった。何か聞きたくてここにつれてこられたんだった。

「澪のこと、どう思ってる?」

鋭い視線に臆してしまいそうになるが一步とどまる。

「好きです。恋愛感情の意味で」

「本当ははけ違ってない?」

親に見向きもされない生活、外に出れば喧嘩を売ってくる不良どもしか寄ってこない。

そんな中転機を変えてくれたのは澪との婚約。澪といることですが、それが変わった。

友も出来てすれ違いの起きていた弟とも中が戻り始めている。

実際本当はそう思ってるんでしょう?」

「それは・・・そうですね」

「尊敬や感謝する気持ちが混じり合わさっているだけで本当は恋愛感情じゃないんじゃない？」

言っとくけれどそんな気持ちで付き合ってたって壊れるだけよ」

ここに来て俺はようやく分かったんだと思う。

彼女は・・・俺を漣から手を引かせようとしている。いや当然の行為なんだろうけれど。

でも彼女の言葉に一理ある。

漣のおかげで今の俺があると言っても過言ではない。

自分のことだけではなく俺のことも考えてくれた彼女に尊敬も感謝もしてる。

でも・・・それだけで守りたいとかそばに居たいと思うのだろうか？

もし泣いているとき、苦しんでいるとき一番に駆け寄りたい、傍に寄り添っていたい、そう思うのは漣だけなんだ。

「たとえば・・・遙さんが言うとおり恋とか愛とかの分類じゃなかったとしても俺が一番守りたいものは漣なんです」

俺は漣の笑顔を守りたい。ただそれだけなんだ。

俺の言葉に少し沈黙を置いて笑い出した遙さん。

そんなに大笑いされると恥ずかしいのですが・・・

「そんな歯が浮いたような言葉人前でいえるわね。」

私も同じ言葉を言われたけれど意味が全然違ったからそう思うようなところも無かったけれど・・・

こつこつと堂々と言われると聞いているこつこちが恥ずかしいわね」

歯が浮いたって・・・

本当のこと言っただけなのに。

「あゝ。いいわ。ええ、あなたに賭けましょう。

ここにある葉牡丹の花言葉どつりになつてくれると信じて。

ひとつだけ、ひとつだけ7親等内でも結婚出来る方法があるのよ」

「え？」

「例外とかそういう特殊な例ではなく全面的に許される方法。

ただかなりの条件が付くけれど」

「あのそれって能力とかですか？」

「まったく。3点を気をつけて過ごせば全く問題なし」

「本当にそれって大丈夫なんですか？」

心配する俺をよそに自信満々で言う。

「当たり前よ。それを証明するために私が呼ばれたんだもの。」

ただしこちらの要求としては澪が自分から庄吾自身が好きだと言わせること。

それが完了しだい行ってあげる。ただその分覚悟が必要だけれどね」
ウィンクする彼女の雰囲気とは似合わないノリが少し沈んでいた心を浮上させた。

多分澪が俺を好きになってくれたとき、一筋の光がさすんだろう。

「葉牡丹の花言葉は祝福や愛を包む。」

利益や慈愛と言った言葉もあるけれど今はその言葉どつりになって欲しいわね。

二人の幸せに祝福を祈るわ」

たとえどんなことが待ち構えていても。

不良ともう一人のワタシ（後書き）

葉牡丹の花言葉『http://www.hanakotoba.name/archives/2005/09/post_362.html』から。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4627n/>

不良と私

2011年10月1日12時20分発行